

張籍詩訳注(17)

——「車遥遥」「妾薄命」「朱鷺」——

畑村 学
橘 英範
佐藤 大志

The Translation and Annotation of the Verses Which Zhang Ji Wrote (17)

Manabu HATAMURA
Hidenori TACHIBANA
Takeshi SATO

要旨 本稿は、中唐の詩人・張籍の詩の訳注(17)である。本篇には、33「車遥遥」・34「妾薄命」・35「朱鷺」(ともに中華書局『張籍詩集』巻一に載録)の訳注を掲載する。

はじめに

本稿より、佐藤大志氏が加わった。佐藤氏は六朝文学の専門家で、これまで楽府を中心に研究して来られた。すでに『六朝樂府文学史研究』(溪水社、二〇〇三年)の著書があり、今後は唐代の樂府も視野に入れて研究を進められる予定である。これまで訳注を作る上で、佐藤氏に意見をうかがうことも多々あったが、今後は一緒に作業を行うことで、今まで以上の質の高い訳注ができるものと大いに期待していただきたい。

訳注

33 車遥遥

【題解】
車ははるばると。
『樂府詩集』巻六九「雜曲歌辭」には張籍も含めて次の作者の同題樂府が載録されている。

二〇〇八年十一月二十八日(受理)

畑村 学 宇部工業高等専門学校一般科准教授
橘 英範 岡山大学文学部言語文科学科准教授
佐藤 大志 広島大学大学院教育学研究科准教授

梁・車敎（七言六句）

唐・孟郊（五言一六句）／張籍（七言一四句）／張祜（七言一〇句）

／胡曾（七言八句）

張籍より前、唐以前では梁の車敎の作（後に述べるように晋の傅玄の作ともされる）が一首あるのみであり、唐代に入り初盛唐には一篇も同題樂府が作られないなか、中唐に至って突然孟郊と張籍が作り、その後中唐から晩唐にかけて、張祜や胡曾といった継承者が現れている。

樂府題の「車遥遥」は、言うまでもなく車敎の詩の冒頭二句「車遥遥兮馬洋洋、追思君兮不可忘」（車遥遥として 馬洋洋たり、君を追思して 忘るべからず）の最初の三字をそのまま詩題にしたものであるが、『樂府詩集』に車敎の作として掲載される詩が、果たして本当に車敎の作であるかについては問題がある。

車敎の詩は、『樂府詩集』では車敎作として載録されるが、『玉臺新詠』巻九・『藝文類聚』巻四二（樂部二・樂府）・『古詩紀』巻三二には、晋の傅玄の作として掲載される。このうち『玉臺新詠』は、『擬北樂府三首』のうちの一首として「車遥遥篇」と題する（文字の異同もあり）。また、『藝文類聚』巻四二に載録されるものは「車遥遥」と題し、末二句が欠けた状態で掲載される。『古詩紀』には巻三二以外に巻一〇三にも同じ詩が掲載されているが、そこでは傅玄の作ではなく、『樂府詩集』と同じく車敎の作となっている。

郭茂倩は、雜曲歌辭の解題では傅玄の作として「車遥遥篇」を取り上げており（中華書局『樂府詩集』、八八五頁）、『樂府詩集』に掲載する際になぜ車敎の作としたのかはよくわからない。張籍の時代、『玉臺新詠』と『藝文類聚』は目にするのができたはずであるから、張籍も傅玄の作として判断したものと考えられるが、どちらの作であったとしても張籍より前に作られているのは確かであり、張籍がこの「車遥遥」を作る際には参照することができたはずである。前代および同時代の孟郊との比較は【補】で詳しく行うことにする。

内容的には、志を抱いて旅に出ている男性の帰りを切に願う女性の思いを詠ずることが主題であり、これが樂府「車遥遥」の特徴の一つと言えよう。

ただ、同様の主題は閨怨詩や他の樂府系の作品に多く見られる特徴であり、「車遥遥」に限ったことではない。樂府「車遥遥」が他の類似した作品と異なる点は、男性への思いの強さを表現する手段として、①男性への呼びかけの言葉である「君」（あるいは「朗」）を意図的に多用している点（車敎は五回、孟郊と張籍は四回ずつ、張祜と胡曾にはそうした意図は無いようである）、②故郷に残された女性が男性の旅の様子を想像し、男性や男性が乗る車に関

連する物―車敎の場合、男性の影（微影）、孟郊は御者の手（馭手）、張籍は車につけられている玉の鈴（玉鑾）、張祜は車の「轍」―に自分を重ねて、男性にすぐにも会いたいという切迫した思いを詠っている点が挙げられよう。これについても、張籍の独自性という視点から【補】のところで詳しく述べることにしたい。

なお、徐澄宇の「題解」では、この詩は32「羈旅行」（巻一）と同じく旅人の苦勞を詠じた内容であるが、「羈旅行」が正面から旅の苦勞を詠ずる詩であるのに対し、「車遥遥」は旅人の家族の口を借りてそれが語られることを指摘している。この問題についても、詩の構成との関係に触れながら【補】のところで見ていくことにする。

【本文・書き下し文】

- | | |
|------------|--------------------|
| 1 征人遙遙出古城 | 征人遙遙として 古城を出で |
| 2 雙輪齊動駟馬鳴 | 雙輪齊しく動きて 駟馬鳴く |
| 3 山川無處不歸路 | 山川 処として歸路ならざるは無し |
| 4 念君長作萬里行 | 念う 君が長く万里の行を作すを |
| 5 野田人稀秋草綠 | 野田 人稀にして 秋草緑に |
| 6 日暮放馬車中宿 | 日暮 馬を放ち 車中に宿る |
| 7 驚麕游兔在我傍 | 驚麕 游兔 我が傍らに在り |
| 8 獨唱鄉歌對僮僕 | 獨り郷歌を唱いて僮僕に對す |
| 9 君家大宅鳳城隅 | 君が家 大宅にして鳳城の隅にあり |
| 10 年年道上隨行車 | 年年 道上 行車に隨う |
| 11 願爲玉鑾繫華軾 | 願わくは 玉鑾と爲りて華軾に繫がれ |
| 12 終日有聲在君側 | 終日 声有りて 君の側に在らんことを |
| 13 門前舊路久已拋 | 門前の旧路 久しく已に拋たれ |
| 14 無由復得君消息 | 復た君が消息を得るに由無し |

【押韻】

城―下平一四清、鳴・行―下平一二庚（同用）
 緑―入声三燭、宿・僕―入声一屋（通押）
 隅―上平十虞、車―上平九魚（通押）
 軾・側・息―入声二四職

【口語訳】

- 1 旅人は はるばるの彼方へと 古い城を出発し
- 2 車の両輪は同時に動いて 四頭の馬は鳴き声を上げて走り出した
- 3 (女) 「山や川があつたつて 帰ってくる道はいくらでもあるはず
- 4 長い間 万里の彼方へと旅をしているあなたのことを思っています」
- 5 (男) 「田野には人の姿はまばらで 緑色の秋の草が生い茂るばかり
- 6 日が暮れたので馬を放ち 車のなかで夜を過す
- 7 驚いたのろや 跳ね回るうさぎが 私のすぐそばにおり
- 8 召使いの少年を前に 寂しく故郷の歌を唱うのだ」
- 9 (女) 「あなたの家は 長安城のすみにある大きなお屋敷
- 10 なのに 毎年毎年 道で遠く旅立つ車を見ては ついて行ったものでした
- 11 どうか 玉の鈴となつて 華やかなあなたの車につながれ
- 12 一日中 りんりんと音を鳴らして あなたの側にいたいのです
- 13 あなたが去つていった門前の道は もうずっと前から捨て置かれたままで
- 14 あなたの消息を知ろうにも その手だてがありません」

【語釈】

- 1・2 征人遥遥出古城、双輪斉動駟馬鳴
 「征人」旅人。出征兵士の意味で用いられる例も古くからあるが、張籍のこの詩、および同題楽府を見る限り、戦争に行く設定になっていると断定できるものはない。例えば、車敷の詩では「君安遊兮西入秦、願将微影随君身」(君 安くにか遊ぶ 西のかた秦に入る、願わくは 微影を将て君が身に随わん)とあり、田舎から大都会の秦都に出かけていく男性を詠じており、孟郊の場合は「丈夫四方志、女子安可留。……此夕夢君夢、君在百城楼」(丈夫 四方の志あり、女子 安んぞ留むべけんや。……此の夕 君が夢を夢み、君は百城の楼に在り)とあるように、大志を抱いて各地を放浪する男性が描かれている。
 旅人か、それとも出征兵士(出征という限定された目的を持った旅人)か、すぐには判断しがたいものも含まれるが、唐以前の用例では、阮侃「答嵇康二首」其二(『古詩紀』卷二八)に、「四牡一何速、征人告路長」(四牡 一に何ぞ速き、征人 告ぐるに路長しと)とあり、陶淵明「答龐參軍」(四部叢刊本卷一)に、「勗哉征人、在始思終、敬茲良辰、以保爾躬」(勗めよや征人、始めに在りて終わりを思い、茲の良辰を敬しみ、以て爾が躬を保て)とあるのは、いずれも旅人、あるいはこれから旅立つ人という意味で解釈できそうである。前者は嵇康を、後者は陶淵明のもとを去る龐參軍のことを「征

人」の語で表現している。

唐詩の用例も初唐から見えるが、その多くは出征兵士の意味で用いられる。喬知之「和李侍郎古意」(『全唐詩』卷八一)に、「閨中宛轉今若斯、誰能為報征人知」(閨中宛轉として 今 斯くの若し、誰か能く為に征人に報じて知らしめん)とあり、韋忠物「宴別幼遐与君睨兄弟」(『韋忠物集校注』卷四)に、「征人慘已辭、車馬儼成裝」(征人 慘ましくして已に辭し、車馬 儼かにして装いを成す)とあるのは、旅人の意味で解釈できる例であると思われる。

杜甫の用例は二例、いずれも出征兵士の意味で用いられている。張籍にはこの他二例、いずれも出征兵士の意味である。10「寄衣曲」(卷一)に、「織素縫衣独苦辛、遠因回使寄征人」(織素 縫衣 独り苦辛し、遠く回使に因りて 征人に寄す)とあつたのも出征兵士の用例。

「遥遥」遠く遙かなさま。旅人の今後の旅程の長さを表現する。楽府題の「車遥遥」、及び車敷の同題楽府に「車遥遥兮馬洋洋、追思君兮不可忘」(車遥遥として 馬洋洋たり、君を追思して 忘るべからず)とあるのを踏まえた表現である。

「遥遥」は、古く、李冬生注も引く『春秋』昭公二十五年「左伝」に、童謡のなかの句として「鸚鵡之巢、遠哉遥遥」(鸚鵡の巢、遠きかな 遥遥たり)と見える。

唐以前の詩の用例も多く、魏文帝・曹丕「於明津作」(『藝文類聚』卷二七)に、「遥遥山上亭、皎皎雲間星」(遥遥たり 山上の亭、皎皎たり 雲間の星)とあるのは山頂にある亭(あずまや)までの距離を言い、陶淵明「贈長沙公」(四部叢刊本卷一)に、「遥遥三湘、滔滔九江」(遥遥たる三湘、滔滔たる九江)とあるのは、長沙公・陶延寿の任地である三湘(湘郷・湘潭・湘陰)までの距離の遠さを言う。陳注は、陶淵明「歸去來兮辭」(四部叢刊本卷五)に、「舟遥遥以輕颺、風飄飄而吹衣」(舟は遥遥として以て軽く颺がり、風は飄飄として衣を吹く)とあるのを引くが、これは、舟がゆらゆらと揺れながら水上を進むさまを表現すると解釈される例のようであり、「はるか遠い」というここの意味とは異なるようだ。同じ陶淵明の用例で、「辛丑歲七月赴飯還江陵夜行塗口」(『文選』卷二六)に、「如何舍此去、遥遥至西荆」(如何ぞ 此を捨てて去り、遥遥として西荆に至る)とあるのは、この詩が『文選』で「行旅」に分類されていることからわかるように、休暇後に任地に戻る旅の様子を詠ずるなかに見え、赴任先までの距離の遠さをこの語で表現する。また、鮑照「東門行」(『文選』卷二八)に、「遥遥征駕遠、杳杳落日晩」(遥遥として 征駕遠く、杳杳として 落日晩る)とあるのは、旅人の乗る車の

様子を詠じており、「征」と二緒に使われている。

唐詩では、初唐から多くの用例が見え、一例として陳子昂「度荆門望楚」(『全唐詩』卷八四)に、「遙遙去巫峽、望望下章臺」(遙遙として 巫峽を去り、望望として 章臺を下る)とある。

杜甫には用例が無い。張籍にはこの一例のみ。同時代の韓愈「嗟哉董生行」(『繫年集釈』卷一)に、「淮水出桐柏山、東馳遙遙千里不能休」(淮水 桐柏山に出で、東のかた馳すること遙遙として 千里も休む能わず)とある。

李冬生注は、この「遙遙」が第一義的には「遙か遠い」の意味であるとしながらも、もう一つの意味として「心の不安定なさま」を指摘し、劉鏢「擬二首」其一「擬行行重行行」(『文選』卷三二)に、「眇眇陵長道、遙遙行遠之」(眇眇として 長き道に陵り、遙遙として 行きて遠く之)とあるのを用例として挙げ、五臣・呂向の「遙遙、心不安貌」(遙遙は、心の安からざる貌)という注を引いている(ただし、劉詩の「遙遙」は「遙か遠い」の意味でも解釈される句のようだ)。**【補】**の構成のところでも述べるが、冒頭の二句は状況設定のための句であり、旅の途中に立ち寄った「古城」から旅を再開するその時の様子を客観的に描写している箇所であると思われる。旅人は、実際には5〜8句に詠われるように、旅の途中に孤独を感じているのであるが、客観的には「双輪 斉しく動」くとあるように、勢いよく出発していくのである。

車敎の同題樂府の冒頭二句「車遙遙兮馬洋洋、追思君兮不可忘」(車遙遙として 馬洋洋たり、君を追思して 忘るべからず)も、旅の不安ではなく、女性のもとから遠く去っていく旅人の様子を詠じており、孟郊の詩の冒頭でも、「路喜到江尽、江上又通舟。舟車兩無阻、何処不得遊」(路は 江に到りて 尽くるを喜び、江上 又舟を通ず。舟と車と 両つながら阻むもの無し、何れの処か 遊ぶを得ざらん)とあるように、舟と車があればどこにだって旅に出られる喜びが詠われている。

以上のことから、この「遙遙」は旅の不安感を表しているのではなく、遙か彼方に旅していく旅人の様子を表現していると解釈する。

「古城」古いまち。寂れた町のイメージを伴う。旅人が旅の途中に立ち寄った古い町を指す。

普通に使われる言葉のようだが、唐以前の詩に用例がない。詩以外では、劉宋の何承天「安辺論」(『宋書』何承天伝)に、「論者必以古城荒毀、難可修復」(論者 必ず古城の荒毀するを以て、修復すべきこと難しとす)と見える。

唐詩では初唐から用例が見える。李百葉「秋晚登古城」(『全唐詩』卷四三)

に、「日落征途遠、悵然臨古城」(日落ちて 征途遠く、悵然として古城に臨む)とあり、王維「送宇文太守赴宣城」(趙注本卷三)に、「地迴古城蕪、月明寒潮広」(地迴かにして古城蕪れ、月明かにして寒潮広し)とある。

杜甫に五例(うち一例は詩題に含まれる)、一例として「南極」(『詳注』卷一八)に、「古城疏落木、荒戍密寒雲」(古城 落木疏らに、荒戍 寒雲密なり)とあるのは、夔州の白帝城を指して「古城」と言っている。

張籍にこの他にも一例、67「送遠客」(卷二)に、「明日重陽節、無人上古城」(明日 重陽の節、人の古城に上る無し)とある。徐注が、旅の苦しみを詠じた詩としてこの詩との類似を指摘する32「羈旅行」(卷二)にも、「荒城無人霜滿路、野火燒橋不得度」(荒城 人無く 霜 路に満ち、野火 橋を焼いて 度を不得ず)と、「荒城」の語が見えた。

「双輪斉動」「双輪」は二つの車輪。旅人の乗る馬車を指す。「斉動」とは、その車輪が同時に動き出すことを言い、旅人が勢いよく出発していく様子と言うのである。

唐代以前の詩に用例がない。唐詩にはいくつか用例が見え、陳注も引く太宗「謁并州大興國寺詩」(『全唐詩』卷一)に、「梵鐘交二響、法日轉双輪」(梵鐘 二響を交え、法日 双輪を転ず)とあるのが最も早い用例であるが、これは仏教の法輪(仏の教えを車輪に喩えたもの)のことを指しているようである。初盛唐の詩には他に用例がなく、杜甫にも無い。中唐から詩に使われることばのようで、張籍にはこの一例のみであるが、同時代の孟郊「自歎」(『孟郊詩集校注』卷三)に、「四蹄日日多、双輪日日成」(四蹄 日日多く、双輪 日日成)とある他、白居易「和春深二十首」其五(二六五七)に、「五匹鳴珂馬、双輪画戟車」(五匹 鳴珂の馬、双輪 画戟の車)とある。孟郊の詩では、日月の運行の速さを馬車のスピードに喩え、白居易の詩では刺史が車で行楽する様子を表現するなかに見える。

「駟馬」車を引く四頭の馬。貴人の乗る乗り物のイメージがある。

古く『老子』六十二章に、「雖有拱壁以先駟馬、不如坐進此道」(拱壁の以て駟馬に先だつと雖も、坐して此の道を進むるに如かず)とある。大きな宝玉を四頭だての馬車で贈るよりも、座ったまま無為の心理を相手に説いて進めることの方が勝っている、という意味である。『史記』管晏伝にも、「其夫為相御、擁大蓋、策駟馬、意氣揚揚、甚自得也」(其れ夫 相の御と為り、大蓋を擁し、駟馬に策うち、意氣揚揚として、甚だ自得せり)とあり、宰相である晏子の乗り物として記される。

古くから詩語としても使われる。漢の武帝が柏梁臺において群臣に七言一

句を作らせた、所謂「柏梁臺聯句」(『藝文類聚』卷五六)に、「日月星辰和四時、駟馬駟馬從梁來」(日月星辰 四時に和す、駟馬 駟馬 梁より来たる)とある。下句は梁王の作。その他、繆襲「挽歌詩」(『文選』卷二八)に、「白日入虞淵、懸車息駟馬」(白日 虞淵に入り、車を懸けて 駟馬を息わしむ)とあり、また、陳注は、庾信「喜晴詔勅自疏韻」(『庾子山集注』卷四)に、「柏梁駟馬、高陵馳六伝」(柏梁 駟馬を駟とし、高陵 六伝を馳す)とあるを引く(陳注は「四馬」に作り、四は駟に通じるとする)。上句は先に引いた柏梁臺での宴会を踏まえている。

唐詩の用例も初唐から多く見える。一例として、宋之問「梁宣王挽詞三首」其三(『全唐詩』卷五二)に、「君王留此地、駟馬欲何歸」(君王 此の地に留まり、駟馬 何くに帰らんと欲する)とあるのは、梁の宣王の車馬。貴人の乗り物である。

杜甫には二例、一例として「覃山人隱居」(『詳注』卷二〇)に、「高車駟馬帶傾覆、悵望秋天虛翠屏」(高車 駟馬 傾覆を帯び、悵望すれば 秋天 虚しく翠屏あり)とあるのも、貴人の乗り物として詠われる例である。張籍の用例はこの一例のみ。

冒頭の二句は、馬車に乗って旅をする旅人を登場させ、全体の状況設定の役割を担っている。2句に「駟馬」とあり、後の9句に「君家大宅鳳城隅」(君が家 大宅 鳳城の隅)とあることから、この旅人はそれなりに地位や身分のある人物であることがわかり、その旅人を「君」と呼び、都で待ち続ける女性も、旅人に相応した身分の女性として設定されていることがわかる。

3・4 山川無処不歸路、念君長作万里行

「山川無処不歸路」女性の待つ都・長安との間には山や川が障壁として存在しているが、帰り道はどこにだってある。帰れないことはない。

「山川」については、この詩と同じく遠い旅に出た男性を待つ女性の立場で詠われた3「雜怨」(卷一)に、「山川豈遙遠、行人自不返」(山川 豈に遙かに遠からんや、行人 自ら返らず)と見えた。その【語釈】を参照。そこですでに記したが、「山川」には険阻な自然というイメージがあり、この「車遥遥」の場合も「雜怨」と同様に、二人の間を阻んでいる山と川であると思われる。張籍の用例は、この二例のみ。

陳注は、「山川」と「帰」の字が同時に用いられる例として、謝靈運「齋中讀書」(『文選』卷三〇)に、「矧迺歸山川、心跡双寂寞」(矧や迺ち山川に帰し、心跡 双つながら寂漠たるを)とあるのを引く。ただし、謝詩が帰るべき故郷の山川を指すのに対し、張籍の詩の場合は、家(長安)から遠く

離れた異郷の山川を言う。

「不歸路」の「不」について、『樂府詩集』・『全唐詩』卷二五・四庫全書本・百名家集本・蜀刻本は「無」に作り、『全唐詩』卷二五の注は「集は不に作る」と説明する。『全唐詩』卷三八二は「不」に作り、注に「一に無に作る」と指摘している。徐注本は「無」に作り、「不」に作るのを非とする。本訳注のテキストは、静嘉堂本と『全唐詩』卷三八二である。

「無…無…」の場合、「…も無いし…も無い」と否定を重ねることで、異郷に旅人の居場所が無いだけでなく、長安にある家Ⅱ女性のいる場所(9句「鳳城」)に帰るための路もないと、終わりのない長旅を続ける旅人の状態を詠う。そこには旅人を心配する女性の気持ちにじんじんでいよう。それに対し「無…不…」の場合、「歸路ならざる無し」と二重否定で読んで強い肯定となり、「山や川がいくら険阻とはいえ、帰り道はいくらでもある、なのにあなたは…」と4句に繋がり、ずっと会えない寂しさのために、長旅を続ける男性をなじる気持ちが込められた表現になるだろう。

本稿では一応テキストに従って「無…不…」で解釈する。「無…無…」の方が確かに筋が通ってわかりやすいが、3「雜怨」との類似、さらには女性の複雑な気持ちを表現し得ているという点で、テキストの方がより勝っていると考えるからである。男性を強く愛するがゆえに相手を責めてしまう女心が巧みに表現されているのは、テキストの方だと思われる。

なお、「…無…無…」の場合、「無処」は「処る無し」と訓読して居場所がないの意味。一例として、古く『楚辞』九弁に、「年洋洋以日往兮、老嶢嶢而無処」(年洋洋として以て日往き、老いて嶢嶢として処る無し)とあり、年老いて住む家の無いことを言う。張籍に「無処」の二字の並びがこの他二例あるが、いずれも「処として…無し」と訓読する例である(159「旧宮人」卷二、190「早朝寄白舍人嚴郎中」卷四)。このことも、「無…不…」の方が相応しいと考える根拠の一つである。

「念君長作万里行」長い間、万里の旅を続けているあなたのことを思う。

「念」は心の中に深く思っただけで離れないこと。「念君」の表現、「念君子」の形で古く『毛詩』秦風「小戎」に「言念君子、温其如玉」(言に君子を念う、温として其れ玉の如し)と見え、女性が出征した夫を思うことの表現に用いられている。

唐以前の詩においても、魏文帝の「燕歌行」(『文選』卷二七)に「群燕辞帰鴈南翔、念君客遊思断腸」(群燕辞し帰りて 鴈南に翔り、君が客遊を念いて 思ひ腸を断つ)といい、謝靈運の「燕歌行」(『樂府詩集』卷三二)に

「秋蟬噪柳燕辭楹、念君行役怨辺城」（秋蟬柳に噪ぎて、燕楹を辞し、君が行役を念いて、辺城を怨む）というなど、他郷にある夫を思う妻の心情を詠じる際に用いた例がある。

唐詩においても、張潮の「江風行」（『全唐詩』卷二一四）に「念君貧且賤、易此從遠方」（君が貧且つ賤なるを念い、此を易えて、遠方に従う）といい、また李白の「北風行」（王琦注本卷三）に「倚門望行人、念君長城苦寒良可哀」（門に倚りて、行人を望み、君が長城に寒に苦しむを念えば、良に哀しむべし）というなど、妻が夫を思いやることを表現した例がある。

杜甫には二例、いずれも友人を思う例。一例を挙げれば、「巴西聞収宮闕、送班司馬入京」（『詳註』卷一三）に「念君經世亂、匹馬向王畿」（念う、君が世亂を経て、匹馬、王畿に向かうを）という。

張籍にはこの他に五例、3「雜怨」（卷二）に「念君非征行、年年長遠途」（念う、君が征行するに非ざるに、年年、長遠の途にあるを）と、旅に出た夫を思う例があり、36「遠別離」（卷一）にも、「念君年少棄親戚、千里万里獨為客」（念う、君、年少にして親戚を棄て、千里万里、独り客と為るを）と、同じく妻の立場から旅に出ている夫を思う例が見える。後の詩には「万里」の語も見える。

「万里行」「万里」は長い距離を表す言葉。古くから詩文に膨大な用例がある。

「万里行」の三字の並びでは、鮑照「代辺居行」（『鮑參軍集注』卷四）に、「少年遠京陽、遙遙万里行」（少年にして京陽に遠ざかり、遙遙たり、万里の行）とある。ここには、張籍の1句に見えた「遙遙」の語も見える。また、梁代の作とされる「木蘭詩二首」其二（『樂府詩集』卷二五）にも、「豈足万里行、有子復尚少」（豈に万里の行に足らんや、子有り、復た尚お少なし）とあり、老いた父が万里の遠征に従軍できないことを言う。

唐詩にも、三字の並びで初唐から用例が見える。一例として、宋之問「送杜審言」（『全唐詩』卷五二）に、「臥病人事絶、嗟君万里行」（病に臥して人事絶え、嗟、君、万里に行く）とある。その他、韋応物「同長源婦南徐寄子西子烈有道」（『校注』卷二）に、「如彼万里行、孤妾守空閨」（彼の万里の行の、孤妾、空閨を守るが如し）とあるのは、友が去っていった後に残る自分を、孤閨を守る女性に準えて詠っている。

以上、この二句は、4句に「君」とあるように、都に残る女性が男性に呼びかける形で詠われており、帰ってこない男性をなじりながらも、長旅を続ける男性を気遣う女性の複雑な心境が女性の視点で詠われている。

5・6 野田人稀秋草緑、日暮放馬車中宿

「野田人稀」「野田」は田畑、「人稀」とは、収穫の時期をすでに終えているため人がいない状態を言うのである。

「野田」について、唐以前の詩では、樂府題の「野田黄雀行」に見える以外では、魏文帝「於玄武陂作」（『藝文類聚』卷九）に、「野田広開闢、川渠互相經」（野田、広くして開闢し、川渠、互いに相経たり）とあり、潘岳「河陽渠作二首」其一（『文選』卷二六）、「譬如野田蓬、幹流随風飄」（譬えば野田の蓬の如く、幹流して、風に随いて飄る）とあるなど、魏晋の頃から用例が見える。

唐詩では初唐から多くの用例が見える。張説「代書答姜七崔九」（『全唐詩』卷八六）に、「婀娜金閨樹、離披野田草」（婀娜たり、金閨の樹、離披たり、野田の草）とあるのは、盛んに春草の茂る田畑を詠っているが、孟浩然「赴京途中遇雪」（『全唐詩』卷一六〇）に、「落雁迷沙渚、饑鳥集野田」（落雁沙渚に迷い、饑鳥、野田に集う）とあるのは、旅の途中に見た冬の雪景色を詠う中に見える。

杜甫には用例がない。張籍にはこの他一例、281「野田」（卷五）と題する詩があり、「漠漠野田草、草中牛羊道」（漠漠たり、野田の草、草中、牛羊の道）と見える。寂れた農村の風景を詠う内容であり、この詩と類似する。

「秋草緑」秋の草が緑色をしている。収穫を終えた田畑に、雑草が生い茂る荒涼とした秋の風景を詠っている。ここでの「緑」は、雑草が伸び放題になった様子を表現する。

「秋草」は詩に常見の語であり、張籍26「北邙行」（卷一）に、「洛陽北門北邙道、喪車麟麟入秋草」（洛陽の北門、北邙の道、喪車、麟麟として、秋草に入る）と見えた。用例については、その【語釈】を参照。

ここでは「緑」と一緒に用いられている例を追加しておこう。陳注も引く「古詩十九首」其二（『文選』卷二九）に、「迴風動地起、秋草萎已緑」（迴風、地を動かして起こり、秋草、萎として已て緑なり）とある。「緑」は、もちろん春や夏の鮮やかな緑とは異なり、雑草として生い茂る草を表現する。この他、張協「苦雨詩」（『藝文類聚』卷二）にも、「寒花發黄彩、秋草含緑滋」（寒花、黄彩を發し、秋草、緑滋を含む）と緑とともに用いられている。

また、晋の王讚の詩に、「朔風動秋草、辺馬有帰心」（朔風、秋草を動かし、辺馬、帰心有り）とあるのは、この詩が『藝文類聚』卷二七「人部・行旅」に載録されていることからわかるように、旅人の望郷を主題とする詩であり、

旅人が目にする辺境の秋の風景として「秋草」が詠み込まれている。

唐詩における「秋草」と「緑」が結びついた用例には、劉長卿「奉送裴員外赴上都」(『全唐詩』卷一四七)に、「離心秋草緑、揮手暮帆開」(離心秋草緑に、手を揮いて 暮帆開く)とあり、わき起こる別れの寂しさを生い茂る秋草に喩えて表現しているのであろう。

杜甫に「秋草」は四例あるが、そのうち「遣興五首」其一(『詳注』卷七)に、「長林何蕭蕭、秋草萋更碧」(長林 何ぞ蕭蕭たる、秋草 萋として更に碧なり)とあるのは、前掲の「古詩十九首」其二を踏まえて寂しい秋の風景を詠ずる中に見える。

「日暮放馬車中宿」日暮れ時、馬を車から外して田野に放ち、自分は車の中で眠りにつく。使われることばはどれも詩語というよりは、口頭の語をそのまま並べただけのような平易なものばかりである。

「日暮」は文字通り日暮れ。古くから詩文に頻見の語。

唐以前の詩で、旅と関わる用例を一例挙げれば、王粲「七哀詩二首」其二(『文選』卷二三)に、「方舟溯大江、日暮愁我心」(舟を方べて大江を溯れば、日暮れて 我が心を愁えしむ)とあるのは、王粲が荊州へ向かう舟旅の様子を詠じたもの。

杜甫にも二十例(うち詩題が二例、テキストに異同があるもの一例)、旅の途上で詠じた例として、「白沙渡」(『詳注』卷九)に、「天寒荒野外、日暮中流半」(天は寒し 荒野の外、日は暮る 中流の半ばに)とある。張籍にこの他八例、339「憶遠」(卷六)に、「行人猶未有帰期、万里初程日暮時」(行人 猶お未だ帰期有らず、万里初程 日暮の時)とあり、406「重平賦作」(卷六)に、「日暮未知投宿処、逢人更問向前程」(日暮れて 未だ投宿の処を知らず、人に逢いて更に問いて前程に向かう)とあるのは、いずれも旅先の日暮れを詠っている。

「放馬」は徐注に、馬を車の轅なぐさから解放して草を食べさせ休ませることを言う」と解説する。

あまりに普通の言葉であるためであろうか。詩の中で使われる例はほとんどなく、唐以前の詩には二例、晋・明帝の太寧年間の童謡(『晋書』五行志)に、「惻惻力力、放馬山側」(惻惻 力力、馬を山側に放つ)とある他、梁代の歌謡「企喻歌四曲」其二(『樂府詩集』卷二五)に、「放馬大沢中、草好馬著臆」(馬を放つ 大沢の中、草好くして 馬は臆おそに著く)とあるのを教えるのみである。後者は美味しい草のために馬が肥えることを言うのであろう。

唐詩にもほとんど用例がない。初唐には一例も無く、張籍以前では杜甫にも用例が無く、李白「戰場南」(王琦注本卷三)に、「洗兵條支海上波、放馬

天山雪中草」(兵を洗う 條支 海上の波、馬を放つ 天山 雪中の草)とあるのみである。同時代にも用例がほとんどなく、王建「隴頭水」(尹占華校注『王建詩集校注』卷一)に、「向前無井復無泉、放馬迴看隴頭樹」(前に向かいて井無く 復た泉無し、馬を放ちて廻り看る 隴頭の樹を)とあるのが唯一の例である。唐以前以後の用例を見る限り、張籍のこの詩も含めていづれも歌謡か樂府系の作品であり、それ故に詩的脚色を懲らした言葉でなくとも、つまり普通に口頭で使われるような言葉であっても詩句のなかで用いることが可能であったのかもしれない。

張籍にこの他一例、77「出塞」(卷二)に、「分營長記火、放馬不収旗」(營を分かちて 長に火を記し、馬を放ちて 旗を収めず)とある。張籍の本集では、樂府は卷一と卷七に載録され、この詩は卷二に載録されており他の樂府詩とは少し扱いが異なるが、『樂府詩集』卷二二に「横吹曲辞」に、皇甫冉や王之渙の同題樂府と一緒に載録されることから明らかなように、樂府系の詩である。内容的にも、いつ、どこで行われた戦争であるかを明記せず、極めて抽象化・普遍化された戦場を描いている点で樂府作品と見なすことが可能である。「放馬」はやはり歌謡や樂府であるために使われることが可能となった言葉であると言えよう。

「車中」車の中。

古くから文中に見える言葉であるが、詩の用例は、漢代の「古詩為焦仲卿妻作」(『玉臺新詠』卷一)に、「下馬入車中、低頭共耳語」(馬より下りて車中に入り、頭を低れて 共に耳語す)と見えて以降、梁代に至るまで用例が無い。しかも、詩題に使われる以外では数例見えるのみである。一例として、梁の呉均「辺城將詩四首」其一(『藝文類聚』卷五九)に、「袖間血灑地、車中旌拂雲」(袖間 血は地に灑ぎ、車中 旌 雲を払う)とある。

唐詩でも、初唐に陳子昂「上元夜效小庾体」(『全唐詩』卷八四)に、「楼上看珠妓、車中見玉人」(楼上に珠妓を看、車中に玉人を見る)とある他は、いずれも中唐以降の用例である。一例として、白居易「新樂府・上陽白髮人」(一三二)に、「憶昔吞悲別親族、扶入車中不教哭」(憶昔 悲しみを吞みて親族に別れ、扶けられて車中に入り 哭かしめず)とある。

先の「放馬」と同じく、詩語と言うよりも口頭の語をそのまま詩に取り入れたような言葉であると思われる。

以上、この二句は、女性の視点で詠われていた前二句から旅人である男性に視点が変化し、秋の寂しい農村の様子を詠うとともに、そこに野宿する旅人自身の様子を詠う。夜になり馬を休ませるといふ表現や、車で寝るといふ

表現は、旅の臨場感を感じさせるリアルな表現であり、張籍自身の旅の経験が反映されているのかもしれない。

7・8 驚麋游兔在我傍、独唱郷歌对僮僕

〔驚麋・游兔〕旅人に驚いた麋と飛び跳ねる兔。野宿する旅人の周囲の自然を詠ずる。「麋」は鹿の一種で、李建崑注では、麋・麋と同じで、獐（くじか、のろ。小型の鹿）のことであると説明する。李冬生注でも獐であると説明する。

唐以前の詩文で「麋」が詠われる例として、古く『毛詩』召南「野有死麋」に、「野有死麋、白茅包之」（野に死麋有り、白茅之を包む）と「麋」が見え、鮑照「蕪城賦」（『文選』卷一一）に、「壇羅虺蜮、階闢麋鼯」（壇には虺蜮を羅ね、階には麋鼯を闢わす）とあり、山中に棲む動物がいるということ、荒城が寂れており、周囲に人がいないことを表現する。

「驚麋」という二字の熟語としては、唐以前及び唐代の詩に用例がほとんど無く、唐以前では、陳注も引く沈約「宿東園」（『文選』卷二二）に、「驚麋去不息、征鳥時相顧」（驚麋 去きて息まず、征鳥 時に相顧みる）と見えるのみである。李善注に先の「野有死麋」を引き、「今以江東人、呼鹿曰麋」（今 江東の人を以て、鹿を呼びて麋と曰う）と解説する。

唐詩で「麋」が詠われる例としては、初唐の李嶠「茅」（『全唐詩』卷六〇）に、「麋包青野外、鷓鴣綺楹前」（麋は包まる 青野の外、鷓鴣は嘯く 綺楹の前）とある他、いくつか用例が見えるが、「驚麋」の形では初盛唐の詩に用例が無く、中唐に至り、張籍以外では劉禹錫「蛮子歌」（『箋証』卷二六）に、「忽逢乘馬客、恍若驚麋顧」（忽ち乗馬の客に逢い、恍として驚麋の顧みるが若し）と比喻として使われる例を見るのみである。

「游兔」は、唐以前及び唐代の詩に用例がない。旅の苦勞を詠じた張籍32「羈旅行」（卷一）に、「寒兔入窟鳥帰巢、僮僕問我誰家去」（寒兔は窟に入り 鳥は巢に帰り、僮僕 我に問う 誰が家にか去ると）と、「寒兔」の語が見えた。「羈旅行」には、8句に詠われる「僮僕」も登場する。

孟郊の同題楽府にも、旅の途中の風景を詠ずるなかに、「旅雁忽叫月、断猿寒啼秋」（旅雁 忽ち月に叫び、断猿 寒くして秋に啼く）と周囲の動物を詠い込んでいる。こうした動物の描写は車敷の詩には無い。孟郊と張籍は韓門の文人であり、交遊も深かったことから、両詩には影響関係が考えられる。

〔独唱郷歌〕独り故郷の歌を唱う。「独唱」はひとりぼっちで歌を唱う。二

字の熟語としては、唐以前の詩文に用例が見当たらない。

唐詩の用例も少なく、張籍以前に一例、寇坦「同張少府和庫狄員外夏晚初霽南省寓直時兼充節度判官之作」（『全唐詩』卷一一〇）に、「高才推独唱、嘉会喜連茹」（高才 独り唱わんことを推め、嘉会 連なり茹うを喜ぶ）とあるのみである。

張籍と同じ中唐の鮑溶「送僧東遊」（『全唐詩』卷四八五）に、「独唱郢中雪、還遊天際霞」（独り唱う 郢中の雪、還た遊ぶ 天際の霞）とあり、上句は、楚の都・郢で高尚な音楽である陽春・白雪を歌っても、唱和する者がほとんどいなかったという宋玉「对楚王問」（『文選』卷四五）の故事を踏まえる。ここでは送られる僧侶の詩歌のすばらしさを言うのであろう。

「郷歌」は郷里の歌。あるいは望郷の歌。

普通に使われることばのようだが、古い用例は見当たらない。鮑照「還都至三山望石頭城」（『鮑參軍集注』卷五）に、「流連入京引、躑躅望郷歌」（流連たり 入京の引、躑躅たり 望郷の歌）と、「望郷歌」の形で見える。梁の張纘「丁貴嬪哀策文」（『梁書』高祖丁貴嬪伝）には、「罷郷歌乎燕樂、廢徹齊于祀典」（郷歌を燕樂に罷め、徹齊を祀典に廢す）と見える。

唐詩では張籍と同じ中唐になって初めて用例が見える。劉禹錫「竹枝詞二首」其二（『箋証』卷二七）に、「楚水巴山江雨多、巴人能唱本郷歌」（楚水巴山 江雨多く、巴人能く本郷の歌を唱う）とあり、張籍より少し後の時代の張祜「題千越亭」（『全唐詩』卷五一）に、「断腸中秋正円月、夜来誰唱異郷歌」（断腸す 中秋 正円の月、夜来 誰か異郷の歌を唱う）とある。前者は巴人にとつての故郷の歌である「竹枝詞」を指して「本郷歌」と言い、後者は異郷の地で聞いた歌を「異郷歌」と言っている。張籍のように二字の熟語としては、唐詩に用例は見られない。

〔僮僕〕一緒に旅をする召使いの少年。僮僕は旅人の乗る御者を務めていたのであろうか。

旅の供となる召使いの存在は、6「行路難」（卷一）に、「弊裘羸馬苦行難、僮僕飢寒少筋力」（弊裘 羸馬 難行に苦しみ、僮僕 飢寒し 筋力少なし）と見えた。その【語釈】を参照。また、徐注がこの詩とテーマが同じであると指摘する32「羈旅行」（卷一）にも、「寒兔入窟鳥帰巢、僮僕問我誰家去」（寒兔は窟に入り 鳥は巢に帰り、僮僕 我に問う 誰が家にか去ると）とあり、ともに旅をする僮僕が詠われていた。

以上この二句は、7句に「我」とあるように、前二句に続いて野宿する旅人や旅人の周囲の風景を旅人の視点で詠ずる。後の【補】で述べるように、

孟郊の同題楽府にも旅先で目にする動物として「旅雁」や「断猿」が登場する。これらがいかにも旅愁を感じさせる伝統的・画的な動物であるのに対し、張籍の詩に詠われる「驚鷹」「や」「游兔」は、実際に旅を経験した者が目にする旅のリアルさが出ているように思う。前二句と同様に、実際の旅の雰囲気を巧みに描いた表現であると言えよう。

9・10 君家大宅鳳城隅、年年道上随行車

〔君家大宅鳳城隅〕あなたの家は大きな屋敷で長安城の端に位置する。

〔大宅〕は大きな屋敷。張籍24「傷歌行」(巻一)に、「長安里中荒大宅、朱門已除十二戟」(長安里中 大宅荒れ、朱門 已に除かる 十二戟)と見えた。その【語釈】を参照。

〔鳳城〕は長安。春秋時代、秦の穆公の娘・弄玉が簫を吹いたところ、鳳が台に降りてきたことから「鳳台」と名づけた。有名な蕭史と弄玉の故事であり、『列仙伝』に見える。鳳台が秦の都である咸陽にあつた関係で、唐の都・長安が「鳳城」と呼ばれるようになったのであろう。

唐以前の詩には「鳳城」の語は見えず、「鳳台」が用いられる。唐代に入り、都が長安に置かれることになり、「鳳城」「丹鳳城」「鳳京」等の呼称が使われるようになる。

初唐から多くの用例が見えはじめ、大明宮での宴会の模様を詠じた李嶠「人日侍宴大明宮恩賜綵縵人勝応制」(『全唐詩』巻六一)に、「鳳城景色已含韶、人日風光倍覺饒」(鳳城の景色 已に韶かなるを含み、人日の風光 倍ます饒かなるを覚ゆ)とある。李冬生注は、沈佺期「奉和立春遊苑迎春」(『全唐詩』巻九六)に、「歌吹銜恩歸路晚、棲鳥半下鳳城來」(歌吹 恩を銜みて歸路晚く、棲鳥 半ば鳳城に下りて來たる)とあるのを引いている。

杜甫には二例、うち諸注が引く「夜」(『詳注』巻一七)には、「步簷倚杖看牛斗、銀漢遙應接鳳城」(步簷 杖に倚りて牛斗を看れば、銀漢遙かにして 応に鳳城に接すべし)とある。銀河が長安城まで続いていると、望郷の思いを詠じた有名な詩である。なお、杜甫のもう一例は「丹鳳城」の形で見える(『送覃二判官』、『詳注』巻二二)。張籍の用例はこの一例のみ。

〔年年道上随行車〕毎年度の上で旅に出る車について回る。

〔年年〕は詩文に常見の語。これまでも張籍の詩に見えた。うち、3「雜怨」(巻一)に、「念君非征行、年年長遠途」(念う 君が征行に非ざるに、年年 長遠の途にあるを)とあるのは、この詩と同じく長い旅に出ている男性(夫)を思う女性(妻)の思いを詠じた詩のなかに見える。

〔道上〕は意味を解しがたいが、ここでは文字通り「道の上」の意味で解釈した。家が長安城内にあることから、地方から長安に集まってくる車や、逆に地方に出ていく車が多く通行しているのであろう。そうした車を大通りで見かけては飛び乗ってついていくことを言うのではなからうか。

〔行車〕は、道を行く車。この詩では、遠く旅に出かける車と言う。

〔管子〕立政に、「五属大夫、皆以行車朝、出朝不敢就舍、遂行」(五属大夫、皆 行車を以て朝し、朝を出づれば敢えて舍に就かず、遂に行く)とある。この場合、「行車」は任地に赴く旅行の際に乗る車のことを言うようである。

唐以前の詩にいくつか用例が見え、傅玄「艶歌行」(『古詩紀』巻三二)に、「遣吏謝賢女、豈可同行車」(吏を遣わして賢女に謝せしむ、豈に行車を同にすべけんや)とあるのは、郡の長官が美人の羅敷を同乗させようとする車と言う。

唐詩では盛唐から用例が見え始める。一例として、王维「送孫二」(趙注本巻八)に、「祖席依寒草、行車起暮塵」(祖席 寒草に依り、行車 暮塵を起こす)とあるのは、別後に孫二が車で去っていく様子を詠っているのであろう。

杜甫にも一例、「溪漲」(『詳注』巻一一)に、「白石明可把、水中有行車」(白石 明かにして把るべく、水中 行車有り)とあるのは、水量が少ないため車が川の中を通れることを言う。張籍にはこの他二例あり、一例として、454「南歸」(巻七)に、「行車未及家、天外非尽程」(行車 未だ家に及ばず、天外 程を尽くすに非ず)とある。

以上、この二句では、女性の視点に戻り、女性の口から男性が長安にいた過去の様子が記されている。「年年 道上 行車に随う」とあることから、男性が家のある長安に安住せず、以前から志を抱いて故郷を離れることに憧れていたことがわかる。孟郊の同題楽府に「丈夫四方志、女子安可留」(丈夫 四方の志あり、女子 安んぞ留むべけんや)とあり、張籍の詩の旅人も同じように大志を頂き、長旅をしているのだと考えられる。

11・12 願為玉鑾繫華軾、終日有声在君側

〔玉鑾〕馬車につける鈴。「玉」は鈴の素材であるとともに、次の「華軾」の「華」と同じく美称であろう。

〔玉鷺〕と通用し(静嘉堂本は「玉鷺」に作る)、この場合、鷺の形を象つた鈴のこと。陳注引く『楚辞』離騷に、「揚雲霓之晻藹兮、鳴玉鷺之啾啾」

(雲霓の晦藹たるを揚げ、玉鸞の啾啾たるを鳴らす)と「玉鸞」の並びで見え、司馬相如「上林賦」(『文選』卷八)にも「建華旗、鳴玉鸞」(華旗を建て、玉鸞を鳴らす)とあり、天子の車の鈴を指す。李冬生注は、顔延之「三月三日曲水詩序」(『文選』卷四六)に、「揺玉鸞、發流吹」(玉鸞を揺らし、流吹を發す)とあるのを引き、この場合も天子の乗る車の鈴を指して言う。

詩の用例としては、唐以前では「玉鸞」「玉鸞」いずれも数例見え、「玉鸞」の並びでは、謝朓「郊祀曲」(本集卷二)に、「鎗鎗玉鸞動、溶溶金陣旋」(鎗鎗として、玉鸞は動き、溶溶として、金陣は旋る)とある。郊祀(天地を祭る祭祀)を行うために都の郊外に出かける、その際に乗る車の鈴。

唐詩では、盧照隣「中和樂九章」歌登封第一(『全唐詩』卷四一)に、「玉鸞垂日、翠華陵煙」(玉鸞は日に垂れ、翠華は煙を陵ぐ)とあり、これも皇帝の乗る車と関係する。杜甫には用例が無く、張籍もこの一例のみ。

以上見てきたように、「玉鸞(鸞)」は天子や貴人の乗り物を指すことが多く、李冬生や李建崑注も張籍のこの言葉天子の車と解釈する。しかし、ここでは愛する男性の車に懸けられる鈴である。同時代で韓門の李賀「房中思」(『李賀歌詩編』卷三)に、「行輪出門去、玉鸞声断続」(行輪 門を出でて去り、玉鸞 声断続す)とある。李賀の詩は、詩題に明記されるように女性の閨房の愁いを詠じた詩であり、「行輪」は旅立つ男性の乗る馬車、「玉鸞」はその車に懸けられている鈴であり、張籍の詩と同じである。

「華賦」美しい車。「賦」はもと車のしきみ。車の前方にあり、横にさし渡してある。「華」は前述の「玉鸞」の「玉」と同じく美称。

唐以前の詩文に用例が見当たらない。唐詩および唐代の散文にも用例未見。

「終日有声在君側」一日中鈴の音があなたのすぐ側で鳴っている。いつでも男性の側にいたい気持ちをごのように表現している。

「終日」は詩文に常見の語であり、杜甫にも十八例、張籍にもこの他五例ある。

以上この二句は、あなたが帰ってきてくれないのなら、車にかける玉の鈴となつて、いつでもあなたの側に寄り添ってほしいと、非現実的な空想を述べることで、男性に会いたい切実な思いを表現している。

13・14 門前旧路久已抛、無由復得君消息

〔門前旧路久已抛〕家の前の道は、あなたが旅立って以来、誰一人として訪

れてきてくれない。「抛」はほうっておく、捨て置くの意味で、ここでは旅人の情報を伝える人が誰一人女性のものを尋ねてきてくれないことを、このような言葉で表現したものと考えられる。

「旧路」は文字通り古いみち。唐以前の詩文にほとんど用例がなく、史書に数例見える以外では、陳の周弘正「和庾肩吾」(『藝文類聚』卷七八)に、「石橋有旧路、靈室儼衆仙」(石橋に旧路有り、靈室に儼かなる衆仙あり)とあるのを数えるのみである。

唐詩では、初唐には用例が無く、中唐前期の劉長卿が詩中で多く使っている。一例として、「送皇甫曾赴上都」(『全唐詩』卷五一)に、「東遊久与故人違、西去荒涼旧路微」(東遊久しくして故人と違い、西のかた荒涼に去りて、旧路微かなり)とある。

杜甫には用例がない。張籍もこの一例のみ。

この一句、『樂府詩集』・『全唐詩』卷二五・三八二・百名家集本は「門前旧轍久已平」に作り、『全唐詩』卷三八二注に「一に路に作る」「一に抛に作る」と指摘する。『四庫全書』・蜀刻本・静嘉堂本は「門前旧宅久已抛」となっている。

「旧轍」は古い轍。それが「久しく已に平か」というのは、旅人が旅に出るからかなりの時間が経ち、轍が埋まって道が平らになっている状態を言う。唐以前の詩文にほとんど用例がない。「旧路」に同じく史書に数例見える以外では、梁の任孝恭「祭雜墳文」(『藝文類聚』卷四〇)に、「庶幽魂遊止、昔径而不疑、塗車往還、瞻旧轍而猶在」(庶わくは、幽魂 遊び止まり、昔径を踏みて疑わず、塗車 往還して、旧轍を瞻て猶お在るがごときこと)とあるのを数えるのみ。

唐詩の用例は張籍を含めて三例、沈佺期「哭蘇眉州崔司業二公」(『全唐詩』卷九七)に、「隼輿懷旧轍、鱣館想虚筵」(隼輿 旧轍を懐い、鱣館 虚筵を想う)とある。杜甫には用例がない。張籍もこの一例のみ。

「旧宅」は文字通り、旅人が住んでいた家。古く「春秋」昭公三年「左伝」に、「卒復其旧宅」(卒に其の旧宅に復す)と見えることばで、その後、張衡「南都賦」(『文選』卷四)に、「於其宮室、則有園廬旧宅、隆崇崔嵬」(其の宮室に於いては、則ち園廬・旧宅有り、隆崇崔嵬たり)とあり、漢の光武帝の宮殿について記す中に見える。唐以前の詩では、陶淵明「雜詩十二首」其七(四部叢刊本卷四)に、「去去欲何之、南山有旧宅」(去き去きて 何くにかんと欲する、南山に旧宅有り)とあり、故郷にあるもとの住居を旧居と呼んでいる。唐詩も初唐から用例が見えるが、杜甫には用例がない。

張籍には四例、4「三原李氏園宴集」(卷一)に、「僕夫守旧宅、為客施榻筵」(僕夫 旧宅を守り、客の為に 榻筵を施す)とあった。その【語釈】も参

照。

〔無由復得君消息〕あなたの情報を手に入れようにもそのすべがない。

「消息」は男性の様子を伝える手紙や情報。古くから詩文に用例がある。蔡琰「悲憤詩」(『後漢書』蔡琰伝)に、「迎問其消息、輒復非鄉里」(迎えて其の消息を問うに、輒ち復た郷里に非ず)とあるのは、匈奴に拉致された作者が、故国からの旅人に故郷の消息を尋ねる内容である。また、劉宋の「読曲歌八十九首」其二十(『樂府詩集』卷四六)にも、「憶飲不能食、徘徊三路間。因風覓消息」(飲を憶いて 食う能わず。三路の間に徘徊し、風に因りて消息を覓む)とあり、男性の消息を風に尋ねる女性が詠われている。

唐詩では初唐から多くの用例が見える。一例として、楊炯「梅花落」(『全唐詩』卷五〇)に、「行人断消息、春恨幾裴回」(行人 消息を断ち、春恨幾たびか裴回する)とあるのは、男性からの音信が途絶え、家の中をうろろする女性の立場で詠われている。

杜甫が好んで用いた言葉であり、詩題も含めて三二例、多く「消息が無い」という否定の形で詠われる。後半生を地方を放浪する生活に費やした杜甫ならではの表現と言えよう。陳注は杜甫の「送蔡希魯都尉還隴右因寄高三十五書記」(『詳注』卷三)に、「因君問消息、好在阮元瑜」(君に因りて 消息を問う、好在なりや 阮元瑜)とあるのを引いている。張籍にはこの他二例、うち161「没蕃故人」(卷二)に、「蕃漢断消息、死生長別離」(蕃と漢と 消息を断ち、死生 長に別離す)とあるのは、戦争により吐蕃の地で消息を断つた友が生きているか死んでいるかわからない状況を詠う。

なお、百名家集本は「復」を「暫」(しばらく)に作る。

以上、この二句は前二句の空想から現実に戻り、再会できないどころか旅人の情報すら得ることができないことを詠い結んでいる。

【補】

一 詩の構成

この詩は換韻の箇所及び誰の視点で詠われているかによって、1く4く5く8く9く14の三つに分けることができる。それぞれの内容は次の通りである。

1く4 状況設定と旅人の帰りを願う女性の心情(女性の視点)

5く8 旅人の目にする寂しい秋の風景(旅人の視点)

9く14 女性の願望と絶望(女性の視点)

1く4句はひとまとまりにしたが、細かく分けると1・2句は状況の設定で、3・4句はそれに対する女性の思いとなる。また、9・10句は、前後と異なる押韻が行われているが、9句から再び女性の視点で詠われ、11・12句に詠われる女性の願望が、9・10句に詠われる旅人の生き方(遠くに出かける車があればすぐにそれに乗って旅に出る)を踏まえていることから、ここでは9く14句までをひとまとまりで考えた。

二 同題楽府との比較

楽府「車遥遥」の特徴は、【題解】で述べたように、旅に出ている男性へ向けた女性の強い思いが、男性に対する直接の呼びかけである「君」の語の多用によって表現される点、男性に会いたい、そばにいたいという願いが、男性や女性の乗る車に関連する物に喩えられ、反実仮想の形で表現される点の二点にある。

では、そうしたなかで、張籍の楽府の独自性はどこにあるのか。以下、張籍より前の作であり、張籍が自らの詩を作る際に参照したと考えられる車敷の作(張籍は傅玄の作と考えていた可能性が高いが)、及び同時代の孟郊の同題楽府と比較しながら、張籍の独自性について見ていくことにしたい。

なお、【題解】で述べたように、同題楽府はこの他張祜と胡曾にもある。しかしながら、張祜が張籍より少し後、中唐後期から晩唐にかけての詩人であり、胡曾が晩唐の詩人であることから、全文を挙げての比較は車敷と孟郊の二人に關してのみ行うことにし、張祜と胡曾の詩については比較の際に適宜触れることにしたい。

まず、車敷と孟郊の詩を挙げる。

車敷「車遥遥」

1 車遥遥兮馬洋洋 車遥遥として 馬洋洋たり
2 追思君兮不可忘 君を追思して 忘るべからず
3 君安遊兮西入秦 君 安くにか遊ぶ 西のかた秦に入る
4 願將微影隨君身 願わくは 微影を將て君が身に随わん
5 君在陰兮影不見 君 陰に在れば 影 見えず
6 君仰日月妾所願 君 日月を仰ぐは 妾の願う所なり

孟郊「車遥遥」

- 1 路喜到江尽 路は 江に到りて尽くるを喜び
- 2 江上又通舟 江上 又舟を通ず
- 3 舟車兩無阻 舟と車と 両つながら阻むもの無し
- 4 何処不得遊 何れの処か 遊ぶを得ざらん
- 5 丈夫四方志 丈夫 四方の志あり
- 6 女子安可留 女子 安んぞ留むべけんや
- 7 郎自別日言 郎 別れし日より言えり
- 8 無令生遠愁 遠愁を生ぜしむる無かれと
- 9 旅雁忽叫月 旅雁 忽ち月に叫び
- 10 断猿寒啼秋 断猿 寒くして秋に啼く
- 11 此夕夢君夢 此の夕べ 君が夢を夢みれば
- 12 君在百城楼 君は百城の楼に在り
- 13 寄淚無因波 涙を寄せんとするに 波に因る無く
- 14 寄恨無因輪 恨みを寄せんとするに 輪に因る無し
- 15 願為馭者手 願わくは 馭者の手と為りて
- 16 与郎迴馬頭 郎と馬頭を迴らさんことを

(1) 旅人の視点の導入

張籍の独自性としてまず指摘できるのは、旅にある男性の視点を入れた点にある。

詩の構成で見たように、張籍の詩の5〜8句は、旅人であり女性の夫（或いは恋人）である男性の視点から詠われている。この四句が旅人の視点で詠われていることは、7句に「我」とあること、7句を含むこの四句が換韻によりひとまとまりになっていることからわかる。こうした異なる視点の導入は、車敕や孟郊の詩には見られない特徴である。車敕の場合は、一篇を通じて「君」が使われているから、すべて郷里で待つ女性の視点であり、孟郊の場合も、状況説明の1〜6句を除いた箇所は、すべて女性の視点から詠われている。

孟郊の詩にも、9・10句に「旅雁忽叫月、断猿寒啼秋」（旅雁 忽ち月に叫び、断猿 寒くして秋に啼く）とあるように、旅人が目にする旅先の風景が記されるが、あくまでもこれは女性が想像した風景であり、旅人の目に実際に写っているわけではない。

5句からのこうした視点の変化は、3・4句「山川無処不帰路、念君長作万里行」（山川 処として帰路ならざるは無し、念う 君が長く万里の行を

作すを）の4句を受けて行われていると考える。4句には、万里の旅を続ける旅人を心配する女性の思いが詠われているが、その強い思いが遠い旅人のもとに届いて旅人と一体となり、旅人の目を通して山村の寂しい秋の夕暮れの風景を見るのである。それは、孟郊の9・10句のように、旅人が見ている秋夜の風景を女性が想像して詠っているのとは、同じく旅人の周囲の風景を描いているにしても意味は異なっていると見えよう。張籍の方が、男性を愛する女性の思いがより強く表現されている。

以上のように、張籍と孟郊の詩には、旅人の見た（であろう）風景が詠われている点や、その風景に動物が詠い込まれている点（張籍の場合は「驚麝」「游兔」、孟郊は「旅雁」「断猿」）、しかもともに季節が「秋」（張籍の5句、孟郊の10句）であり、時間は夜（張籍の6句、孟郊の9句「月」）である点で共通しており、両者には影響関係があったと見て間違いないであろう。孟郊と張籍はともに韓門の文人であり、詩の贈答もあることから、二人は互いに深く知る関係であった。どちらの詩が先に作られたかはわからないが、張籍より孟郊が十五歳ほど年長であることや、張籍456「贈孟郊」（巻七。「古風二十七首」のうちの一首）に、「淳意発高文、独有金石声」（淳意 高文を発し、独り金石の声有り）とあるように、張籍が孟郊の詩を非常に高く評価していたことから考えて、この「車遥遥」は、張籍が孟郊の表現を参照しつつ、孟郊の詩を上回ろうとして表現の工夫を試みたのかもしれない。孟郊と張籍の楽府の関係については、今後の検討課題としたい。

なお、張籍の9句に「君が家」とあるように、旅人の視点は9句から再び女性の視点に戻っているが、これは8句の「郷歌」を受けている。旅の供である召使いの少年を前に故郷の歌（郷歌）を唱っていたら、郷里の「鳳城」（長安）を懐かしく感じ、それとともに視点も女性に再び戻った（張籍が戻した）のではなからうか。

以上のように、張籍はこの詩を作る上で詩全体の構成を非常によく計算していることがわかる。一読しただけでは異質に見える旅人の視点を導入した5〜8句の四句も、女性の強い思いが旅人と一体となり、そして郷里の歌を唱うという一句によって場面が再び女性のいる長安へと戻っており、張籍の工夫が見て取れる。

(2) 旅人の旅愁の描出

楽府「車遥遥」に登場する旅人は、みな自らの志を遂げるために故郷を離れ、望郷の念を抱いたり故郷に残した女性を顧みたりすることはない。

車敕の詩は一篇を通じて女性の思いを詠じており、孟郊の詩では、「丈夫

四方志、女子安可留」（丈夫 四方の志あり、女子 安んぞ留むべけんや）とあるように、志を抱いて旅に出る男性と、それを引き留めることができないう女性が対照的に詠われている。孟郊の9・10句「旅雁忽叫月、断猿寒啼秋」（旅雁 忽ち月に叫び、断猿 寒くして秋に啼く）は、如何にも旅人に旅愁を抱かせる典型的な風景であるが、(1)で述べたようにこれは女性が想像した旅先の風景であり、続く11・12句に「此夕夢君夢、君在百城楼」（此の夕べ 君が夢を夢みれば、君は百の城楼に在り）とあるように、たとえ旅人の周りに女性の想像するような秋夜の寂しい風景が広がっていたとしても、旅人が夢に見るのは、自分がこれから旅で訪れるさまざまな都市の街並みである。こうした旅人と女性の心情の乖離は、張祜の詩にも「君心若車千万転、妾身如轍遺漸遠」（君が心は車の若く、千万転じ、妾が身は轍の如く 遺りて漸く遠し）と、楽府「車遥遥」らしく車に関連する比喩を用いてその対照的な両者の心境が表現されている。

それに対し張籍の詩では、旅人の視点で詠われる四句（5〜8句）のうちの8句「独り郷歌を唱いて僕僕に對す」に、旅人の旅愁が間接的に表現されている。張籍自身も、冒頭の1・2句で「征人遥遥出古城、双輪齊動駟馬鳴」（征人遥遥として 古城を出で、双輪齊しく動きて 駟馬鳴く）と、古城を勢いよく出ていく旅人の様子を詠じ、3句では、いつでも帰ってくるができるにも関わらず帰ってこないことと詠い、また9・10句で「君家大宅鳳城隅、年年道上随行車」（君が家 大宅にして鳳城の隅にあり、年年 道上 行車に随う）とあるように、長旅の前、長安にいた時からしよちゅう旅に出ていたと詠うことで、今回の長旅も、車敕や孟郊が描く旅人と同じように、旅人が自ら望んだ旅であったとして詠っている。しかしながら、そうした自分から求めた旅ではあっても、旅の途中にふと人恋しく、そして故郷を懐かしむことは人情としても当然であったであろう。張籍はそうした旅人の微妙な心境を、この四句で巧みに詠っている。

(3) 反実仮想

【題解】すでに述べたように、楽府「車遥遥」の表現上の特徴として、旅人である男性に会いたい切実な思いを、女性が、男性や男性の乗る車に関連するものに自己を仮定して表現する、言わば「反実仮想」の表現が見られる点が指摘できる。

車敕の詩では、全六句のうちの四句（3〜6句）がそれに当たり、旅人と一緒にいたいという強い思いが、旅人の影（「微影」）になりたいという仮定の表現によって詠われている。孟郊の場合は、結びの二句に反実仮想が見え、

旅人を自分の元に引き戻したいという思いを、「願為馭者手、与郎迴馬頭」（願わくは 馭者の手と為りて、郎と馬頭を迴らさんことを）と、旅人が乗る馬車を操る御者の手に自己を仮定して表現する。張祜の場合は、反実仮想の代わりに比喩表現が用いられており、(1)ですで見たとように「君心若車千万転、妾身如轍遺漸遠」と、猛スピードで去っていく車輪に旅人の逸る心を喩え、自らを地面に残された車輪の跡に喩えている。

車敕の表現はやや新奇性に欠ける印象を受けるが、孟郊の、御者ではなく御者の「手」になりたいと言う表現や、張祜の、ぐるぐる高速で回転する車輪と、車輪によって地面に残された轍の比喩は、やはり彼らの工夫が見て取れる表現であると言えよう。

それに対して張籍の場合どうか。張籍は、車敕や孟郊と同じく「願わくは……」の句法を使い、旅人である男性と片時も離れずいたいという思いを「願為玉鑾繫華軾、終日有声在君側」（願わくは 玉鑾と為りて華軾に繫ぎ、終日 声有りて 君の側に在らんことを）と言い、車馬での長旅がモチーフである楽府「車遥遥」に相応しく、車にぶらさげる玉製の鈴（玉鑾）を女性が自らを仮定するものとして出している。言いたいことは車敕の詩と同じくいつでもあなたに寄り添っていたいということなのであるが、「玉鑾」を用いたことにより、この詩の女性が美しくかつ可愛らしく造形されることになる。また、車が動きたびにちりんちりんなる鈴は、聴覚的にもこの詩に広がりを与えており、張籍の工夫の跡を見ることができよう。

以上のことと関連して、詩の結びの違いについて最後に述べておきたい。これまで見てきた一緒にいたい、自分の元に帰ってきて欲しいと願う女性の願望は、車敕や孟郊の詩句ではいずれも詩の末尾に詠われていた。ところが張籍は、願望を述べた詩句の後に、「門前旧路久已抛、無由復得君消息」（門前の旧路 久しく已に抛たれ、復た君が消息を得るに由無し）の二句を追加している。この二句によって女性は空想から再び現実の世界へと引き戻され、それによってひとり故郷に取り残され、旅人の消息すら分からないその悲哀感が強調されることとなっている。ここにも張籍の工夫を見ることができよう。（畑村）

34 妾薄命

【題解】

「妾薄命」は楽府題の一つ、「私はふしあわせ」の意。「妾」は女性の一人称の謙称、「薄命」は不運、不幸。

この楽府題は、後に掲げる詩人たちの「妾薄命」の諸注や李冬生注にいうように、漢の成帝の許皇后が儉約を命じられたことに対してたてまつった上疏文（『漢書』外戚伝下）の「奈何妾薄命」（妾の薄命なるを奈何せん）ということばから取られたようである（ただし、中華書局点校本等は、「其餘誠太迫急、奈何。妾薄命、云々」（其餘は誠に太だ迫急なるは、奈何せん。妾は薄命にして、云々）と途中で句読を切っている）。

『楽府詩集』巻六二「雜曲歌辭」の「妾薄命」の条には、次の作者の詩が収められている。

魏・曹植（二首）

梁・簡文帝／劉孝威／劉孝勝

唐・崔国輔／武平一／李百薬／杜審言／劉元淑／李白／孟郊／張籍／李端

（三首）／盧綸／盧弼／胡曾／王貞白

最も古いものは魏の曹植の二首であるが、『楽府詩集』に引く『楽府解題』に「妾薄命、曹植云、日月既逝西藏、蓋恨燕私之歎不久。梁簡文帝云、名都多麗質、傷良人不返、王嬙遠聘、盧姬嫁遲也」（妾薄命、曹植の、日月既に逝きて西に藏ると云うは、蓋し燕私の歎びの久しからざるを恨むならん。梁の簡文帝の、名都に麗質多しと云うは、良人の返らず、王嬙の遠く聘せられ、盧姫の嫁すること遅きを傷むなり）というように、後の詩人の諸作とは異なり、どちらも女性性は登場するものの、其一「携玉手喜同車」は園遊の楽しみを述べ、其二「日月既逝西藏」は宴席の歎びを詠じた内容となっている（いずれも伊藤正文注『曹植』〔岩波中国詩人選集三、一九五八年〕に訳注が収められているので、詳細についてはそちらを参照いただきたい）。梁の簡文帝以降、楽府題にふさわしく、女性の歎きを詠ずる作品となったようである。

これらの「妾薄命」の系譜の中で、張籍のこの詩がどのような位置を占めているかについては、【補】の部分で触れることにしたい。

【本文・書き下し文】

- 1 薄命嫁得良家子 薄命 嫁し得たり 良家の子
- 2 無事従軍去万里 無事にして 従軍し 去ること万里
- 3 漢家天子平四夷 漢家の天子 四夷を平らぐれば
- 4 護羌都尉裏戸歸 護羌都尉 戸を裏んで帰る
- 5 念君此行爲死別 君が此の行 死別と為らんことを念えば
- 6 對君裁縫泉下衣 君に対して 裁縫す 泉下の衣

- 7 與君一日爲夫婦 君と 一日 夫婦と為り
- 8 千年萬歲亦相守 千年万歳 亦た相い守らん
- 9 君愛龍城征戰功 君は愛す 龍城 征戰の功を
- 10 妾願青樓歌樂同 妾は願う 青樓 歌樂の同じきを
- 11 人生各各有所欲 人生 各各 欲する所有り
- 12 詎得將心入君腹 詎ぞ 心を將て 君の腹に入るを得ん

【口語訳】

- 1 不幸な私 良家の子息に嫁ぐことはできましたが
- 2 夫は 訳もなく従軍して万里の彼方へと行ってしまいました
- 3 漢の天子様が 四方のえびすを平らげると
- 4 護羌都尉が しかばねを包んで帰ってくるもの
- 5 あなたの今度の旅立ちも 死出の旅路になると思うと
- 6 あなたを目の前にして 死に装束を縫っていることになるでしょう
- 7 あなたと一度 夫婦となったからは
- 8 千年も万年も 心変わりはありませんが
- 9 あなたは 龍城で戦功を挙げることを望み
- 10 私は 青樓と一緒に音楽を楽しみたいと願うのです
- 11 人というもの それぞれ欲しいものは違っています
- 12 私の心臓を あなたの腹の中に入れることはできないのです

【語釈】

1・2 薄命嫁得良家子、無事従軍去万里

〔薄命嫁得良家子〕ふしあわせな私は、良家の子弟に嫁ぐことはできたが。

この句、百名家集本はこのように作っており、底本（中華書局本『張籍詩集』）は、『全唐詩』注に記す一本がこの形に作るのに従う。四部叢刊本は「薄命（良嫁）得家子」（良嫁は割注）に作るが、このままでは意味が通じがたい。静嘉堂本・『楽府詩集』・『全唐詩』などは「薄命婦、良家子」に作る。

こちらであれば、「薄命の女性と良家の子弟」ということになるだろう。

「薄命」は【題解】参照。楽府題以外でこのことばが詩に用いられた例としては、唐以前では梁の費昶「行路難二首」其一（『玉臺新詠』巻九。『藝文類聚』・『文苑英華』は呉均の作とする）に「当年翻覆無常定、薄命為女何必羸」（当年 翻覆 常に定まる無し、薄命 女と為るも 何ぞ必ずしも羸ならん）といい、陳の江総の「姫人怨服散篇」（『文苑英華』巻三四六）に「薄命夫婿好神仙、逆愁高飛向紫煙」（薄命 夫婿 神仙を好み、愁いに逆らい 高く飛んで 紫煙に向かう）という句がある。前者は貧困に苦しんでいた

女性が急に天子に召し抱えられたことを詠じた詩で、かつての貧しい境遇を「薄命」と表現した例のようである。後者は夫が自分を置いて登仙したことを表現した例のようだ。

唐に入つて、喬知之の「下山逢故夫」(『全唐詩』卷八一)に「妾身本薄命、輕棄城南隅」(妾が身 本より薄命、輕棄せらる 城南の隅)という例は、夫に捨てられたことを「薄命」と表現した例。王昌齡の「長信秋詞五首」其四(『全唐詩』卷一四三)に「真成薄命久尋思、夢見君王覺後疑」(真成に薄命にして 久しく尋思す、夢に君王に見え 覺めて後疑う)という例は、寵愛の衰えた宮女について用いた例で、「補」で触れるように、宮怨は「妾薄命」の伝統的な題材である。

杜甫の一例は「錦樹行」(『詳註』卷二〇)に「自古聖賢多薄命、姦雄惡少皆封侯」(古より 聖賢は多く薄命、姦雄惡少 皆な侯に封ぜらる)という例で、男性に用いた珍しい例。

張籍には「薄命」の用例はもう一例、442「離婦」(卷七)に「薄命不生子、古制有分離」(薄命にして 子を生まず、古制 分離有り)という。これは男子を産めなかったために離縁されることになったことを「薄命」と表現した例である。

「嫁得」とつづことができた。「古詩為焦仲卿妻作」(『玉臺新詠』卷一)に「先嫁得府吏、後嫁得郎君」(先に府吏に嫁し得て、後に郎君に嫁し得たり)というように、単に嫁ぐことができたという意味でも用いられるが、庾信の「怨歌行」(『庾子山集注』卷五)に「家住金陵前、嫁得長安少年」(家して住む 金陵の前、嫁し得たり 長安の少年)という例では、この詩と同じく結婚した夫が従軍しているようで、とつづことはできるにはできたが、と逆接で後に続く。このような例も多いようである。

唐に入つて、李白の「山鷓鴣詞」(王琦注本卷八)に「嫁得燕山胡雁婿、欲銜我向雁門歸」(嫁し得たり 燕山 胡雁の婿、我を銜んで雁門に向かいて帰らんと欲す)といい、李益の「江南詞」(『全唐詩』卷二八三)に「嫁得瞿塘賈、朝朝誤妾期」(嫁し得たり 瞿塘の賈、朝朝 妾が期を誤る)という例なども、逆接で繋がる例のようだ。杜甫には例がなく、張籍にはこの例のみ。

「良家子」は高い身分の家の子弟。28「少年行」(卷一)に「不同六郡良家子、百戰始取辺城功」(同じからず 六郡 良家の子の、百戰して 始めて辺城の功を取るに)の句が見えた。その【語釈】参照。そこで触れたように、兵士や狩獵の名手が良家の子弟から選ばれるというイメージがあった。この詩でも、夫は兵士となって従軍する。

「無事」「何も無い、大事がない」あるいは「なすべき事がない、努めることがない」などの意にも用いられるが、ここでは李建崑注が指摘するように、「何にも事がないのに、さしたる理由もなく」の意。

他の意味と区別しにくいものもあり、以下に挙げる例でも他の意味で解釈する可能性もあるが、顔之推の「和陽納言聽鳴蟬篇」(『初學記』卷三〇)に「容止由来桂林苑、無事淹留南斗城」(容止 由り来たる 桂林の苑、無事にして淹留す 南斗の城)といい、庾信の「楊柳歌」(『庾子山集注』卷五)に「定是懷王作計誤、無事翻復用張儀」(定めて是れ 懷王 計を作すの誤りならん、無事にして 翻復して 張儀を用う)というなどの例は、この意味で解せるのではないだろうか。

唐詩においては、李白の「梁甫吟」(王琦注本卷三)に「白日不照吾精誠、杞国無事憂天傾」(白日 吾が精誠を照らさず、杞国 無事にして 天の傾くを憂う)といい、韋応物の「擬古詩十二首」其二(『韋応物集校注』卷一)に「無事久離別、不知今生死」(無事にして久しく離別し、今の生死を知らず)という例などはこの意味で解せるようである。

杜甫には四例あるが、この意味の例はないようだ。張籍には他に六例、この意味の例は他にはないようである。

「従軍」軍隊に従う。古く『墨子』号令に「小鼓五後従軍、斷」(小鼓五たびして後に軍に従うは、斷ず)というなど、常見の語。

詩においても、「古詩三首」其二(『古詩類苑』卷七七)に「十五従軍征、八十始得歸」(十五にして 軍に従いて征き、八十にして 始めて歸るを得)というなど古くから多くの詩に用例があるほか、第一首が「従軍有苦樂」(従軍に苦樂有り)で始まる王粲の「従軍詩」(『文選』卷二七)以来、詩のテーマの一つとなり、また「従軍行」の樂府題も生まれている。

唐に入つても、樂府題や詩題中の用例が多く見えるほか、辛常伯の「軍中行路難」(『全唐詩』卷六三)に「昔時聞道従軍樂、今日方知行路難」(昔時 聞道く 従軍の樂しみを、今日 方を知る 行路の難きを)といい、李白の「白馬篇」(王琦注本卷五)に「發憤去函谷、従軍向臨洮」(憤りを發して 函谷を去り、軍に従いて 臨洮に向かう)というなど、詩中の用例も多い。後者はことと同じく戦功を立てようと従軍する例。

杜甫には詩中に二例、一例を挙げれば、「前出塞九首」其九(『詳註』卷二)に「従軍十年余、能無分寸功」(軍に従うこと 十年余り、能く分寸の功無からんや)という句がある。

張籍には他に詩題に一例、詩中に一例。214「送侯判官赴広州従軍」(卷四)の詩題の例は「従事」に作るテキストもある。詩中の例は、452「哭于鵠」(卷

七)に「野性疏時俗、再拜乃従軍」(野性 時俗と疏にして、再拜して 乃ち従軍す)というもの。于鵠の生前の従軍の事跡を詠じた例。

〔去万里〕万里のかなたへと出かけていった。「万里」は遠い距離を表す頻見の語。

隔たりを表現した例ではあるが、「去万里」の並びで、古く李陵の「答蘇武書」(『文選』巻四一)に「相去万里、人絶路殊」(相い去ること 万里、人絶え 路殊なる)という例がある。

万里にゆくといえは、旅を詠じた李白「送友人」(王琦注本卷一八)の「此地一為別、孤蓬万里征」(此の地 一たび別れを為せば、孤蓬 万里征く)の句が直ちに想起されるが、鮑照の「代辺居行」(『鮑參軍集注』巻四)に「少年遠京陽、遙遙万里行」(少年にして 京陽に遠ざかり、遙遙たり 万里の行)といい、隋の盧思道の「従軍行」(『樂府詩集』巻三二)に「従軍行、軍行万里出菴庭」(軍に従いて行き、軍行すること万里 菴庭に出づ)といい、高適の「送渾將軍出塞」(『全唐詩』巻二二三)に「意氣能甘万里去、辛勤判作一年行」(意氣 能く甘んず 万里の去、辛勤 判じて作す 一年の行)といい、韋元甫の「木蘭歌」(『全唐詩』巻二七二)に「豈足万里行、有子復尚少」(豈に万里の行に足らん、子有るも 復た尚お少なし)というなど、従軍に関して万里にゆくと表現した例も多い。

杜甫には七十を超える「万里」の例があるが、そのうち「寄杜位」(『詳註』巻一〇)に「逐客雖皆万里去、悲君已是十年流」(逐客 皆な万里に去ると 雖も、悲しむ 君が已に是れ 十年流さるるを)という例は、「去」の文字とともに用いる。

張籍には十六例の「万里」の用例があり、前詩33「車遥遥」(巻一)にも旅の距離の長さをいう「山川無処不歸路、念君長作万里行」(山川 処として 歸路ならざる無し、念う 君が長く万里の行を作すを)の句が見えたが(その【語釈】参照)、「征」とともに用いる³²⁴「隣婦哭征夫」(巻六)の「双鬢初合便分離、万里征夫不得隨」(双鬢 初めて合して 便ち分離し、万里の征夫 隨うを得ず)の例は、ここと同じく夫が従軍した妻を詠ずる詩に用いた例である。

冒頭の二句、一韻でひとまとまり。不幸な私は、なんとかよい人の家に嫁ぐことができたが、その夫が、徴兵されたわけでもないのに、意味もなく従軍して、万里のかなたへと出かけていく。結婚したのはよいが、夫が自分をおいて戦場へ行ってしまうという状況を述べる二句。従軍の理由はここでは説明されず、「無事」とのみ述べられているが、後の部分を見れば、「征戦功」

すなわち戦場で一旗揚げようということであるのが分かる。しかしそれは、女性の目から見れば「無事」にほかならないことも、後の部分から明らかである。

3・4 漢家天子平四夷、護羌都尉褫尸婦

〔漢家天子〕漢王朝の天子。白居易の「長恨歌」の冒頭の句「漢皇重色思傾国」(漢皇 色を重んじて 傾国を思う)に関連してしばしば語られるように、唐代の詩では、漢の時代に舞台設定をすることがよく行われた。この詩も漢代のこととして歌われていることが分かる。

「○家天子」という例については、22「永嘉行」(巻一)の「晋家天子作降虜、公卿奔走如驅羊」(晋家の天子 降虜と作り、公卿 奔走すること 羊を驅るが如し)の句の【語釈】参照。

なお、陳注は李頎の「古從軍行」(『全唐詩』巻一三三)に「年年戰骨埋荒外、空見蒲桃入漢家」(年年 戰骨 荒外に埋め、空しく見る 蒲桃の漢家に入るを)という句を引いている。

〔平四夷〕四方の異民族を平定する。

「四夷」は四方の異民族。東夷・南蛮・西戎・北狄の四者を、そのうちの「夷」によって代表させたもの。経書にも多く見えることばで、陳注は『春秋』昭公二十三年の『左伝』に「古者、天子守在四夷」(古は、天子の守りは四夷に在り)というのを引き(陳注には出典を『礼記』とするが、『礼記』にはこの表現は見えないようである)、李樹政注は『孟子』梁惠王上に「欲辟土地、朝秦楚、莅中国而撫四夷也」(土地を辟き、秦楚を朝せしめ、中国に蒞んで四夷を撫せんと欲するなり)というのを引き、李冬生注は『尚書』大禹謨に「無怠無荒、四夷来王」(怠る無く荒む無くんば、四夷来王せん)というのを引いている。

唐までの詩においては、古く漢の武帝が大宛の千里の馬を得た時に作った歌(『史記』樂書)に「承靈威兮降外国、涉流沙兮四夷服」(靈威を承けて外国に降り、流沙を涉りて四夷服す)といい、魏の明帝の「野田黄雀行」(『文選』巻二一謝瞻「張子房詩」注に引く)に「四夷重訳貢、百姓謳吟詠太康」(四夷 訳を重ねて貢し、百姓 謳吟して 太康を詠ず)というなどの例はあるが、晋宋以降の詩人たちの作には例が見えないようで、詩語としては定着していなかったようだ。

唐に入ってから同様で、初唐の詩人には例が見当たらず、杜甫に至って「後出塞五首」其三(『詳註』巻四)に「六合已一家、四夷且孤軍」(六合 已に一家なるに、四夷 且つ孤軍す)という例が見える。杜甫の例はこの一例

のみ。中唐以降は李益の「登長城」(『全唐詩』卷二八二)に「当今聖天子、不戰四夷平」(当今 聖天子、戦わずして 四夷平らぐ) というなど、用例が多くなっている。ただ、張籍の用例はこれのみである。

〔護羌都尉〕「羌」は中国西方の異民族の一つで、「護羌」はそれを保護・管理する意味。「都尉」は秦代に始まる官名。各郡の郡守の次官を尉といい、軍事をつかさどったが、漢代に都尉と改名された。のち、武官の称号となったという。

徐注・李樹政注は「護羌都尉」という官職があったかのように注しているが、実際にはこの官職名はなかったようで、「護羌校尉」(校尉は本来宮城を守る武官、漢代に異民族に対応する「烏桓校尉」「護羌校尉」などが置かれた)または「護軍都尉」という官職が漢代にあるのみのようだ。『三国志』魏志・賈逵伝の裴松之注に引く『魏略』の楊沛の伝記に「沛為令數年、以功能為護羌都尉」(沛 令為ること數年、功能を以て轉じて護羌都尉と為る)というなど、歴史書などに「護羌都尉」の用例もないわけではないが、伝記的な資料に僅かな例が見えるのみで、官職について体系的に記した「職官志」などの資料には見えない。少なくとも正式な官職名ではなかったであろう。一方、李冬生注は「護羌校尉」の別名としており、李建崑注も同じような記載をしているが、その根拠はよく分からない。また、別名であるとしても、用例が極めて少ないところからして、広く用いられていた名称ではなさそうである。

なお、陳注は『漢書』百官公卿表に「護軍都尉、秦官」(護軍都尉は、秦官なり)という記述を引き、さらに王維の詩の「護羌都尉朝乘障」という句を引くが、王維の「出塞作」(趙本卷一〇)は「護羌校尉朝乘障、破虜將軍夜度遼」(護羌校尉 朝に障に乘じ、破虜將軍 夜に遼を度る)と実際に存在した官職名の「護羌校尉」に作っている。李建崑注は『後漢書』百官志五に「護羌校尉一人、比二千石。本注曰、主西羌」(護羌校尉一人、比二千石。本注に曰く、西羌を主る)という記述を引く。李冬生注は、『後漢書』西羌伝に「及武帝征伐四夷、開地広境、北徇匈奴、西逐諸羌、乃度河湟、築令居塞」(武帝の四夷を征伐し、地を開き境を広ぐるに及んで、北のかた匈奴を御せ、西のかた諸羌を逐い、乃ち河湟を度り、令居塞を築く)という記述を引いている。

詩においても「護羌都尉」の語は、唐以前の詩・『全唐詩』を通じてこの他に用例を見いだせない。

「護羌」は唐までの詩に一例、梁の簡文帝の「隴西行三首」其二(『文苑英華』卷一九八)に「護羌擁漢節、校尉立功勳」(護羌 漢節を擁し、校尉

功勳を立つ)という例がある。張籍はここで対句にされている護羌と校尉を組み合わせてこの官職名を作り出したのかもしれない。

唐に入り、先に引いた王維の例の他に、皇甫冉の「送魏中丞還河北」(『全唐詩』卷二五〇)に「辛勤戎旅事、雪下護羌營」(戎旅の事に辛勤すれば、雪は下る 護羌の營)といい、權徳輿の「贈別表兄韋卿」(『全唐詩』卷三二四)に「新読兵書事護羌、腰間宝剑映金章」(新たに兵書を読んで 護羌に事え、腰間の宝剑 金章に映ず)というなどの例が見える。杜甫には用例がなく、張籍にはこの例のみ。

「都尉」の方は唐以前から詩に多くの用例がある。実際にこの官職に就いている人物を指す例のほか、李陵が騎都尉となったため、江淹の「雜體詩三十首」其二「李都尉(陵)從軍」(『文選』卷三一)のように、李陵を指す例が多いようである。

梁の劉孝威の「思婦引」(『樂府詩集』卷五八)に「貳師已喪律、都尉亦銷魂」(貳師 已に律を喪い、都尉 亦た銷魂す)という例は李広利の故事と李陵の故事を並べたもの。ほかに、庾信の「有喜致醉」(『庾子山集注』卷四)に「既喜校都尉、能飲陸大夫」(既に喜ぶ 校都尉、能く飲ぶ 陸大夫)という例は、漢の枚乗が弘農都尉になったことに基づいた例である。

唐に入り、李嶠の「詩」(『全唐詩』卷五九)に「都尉仙臯遠、梁王駟馬來」(都尉 仙臯遠く、梁王 駟馬來たる)という例は、李陵が蘇武との別れに際して作った詩に臯を詠じた故事を用いたもの。李陵の故事を特に踏まえない例としては、鄭愔の「塞外三首」其二(『全唐詩』卷一〇六)に「將軍猶轉戰、都尉不成名」(將軍 猶お轉戦するも、都尉 名を成さず)という例がある。

杜甫には詩題に友人の官職名としての一例が見えるのみ、張籍には他に用例が見えない。

「裹尸婦」死体を包んで帰ってくる。勝利の影に多くの犠牲者がいることを述べたのであろう。後漢の伏波將軍馬援の故事を用いた表現。

『漢書』馬援伝に、「男兒要當死於邊野、以馬革裹屍還葬耳。何能臥床上在兒女子手中邪」(男兒 要らず當に邊野に死し、馬革を以て屍を裹みて還り葬らるのみ。何ぞ能く床上に臥して兒女子の手中に在らんや)という馬援の言葉を載せる。「屍」は「尸」に同じ。

唐までの詩においては、梁の何遜の「見征人別詩」(『古詩紀』卷九四)に「且當橫行去、誰論裹屍人」(且く當に 橫行して去るべし、誰か論ぜん 屍を裹んで入るを)といい、陳の沈炯の「建除詩」(『藝文類聚』卷五六)に「成師鑿門去、敗績裹屍旋」(師を成して 門を鑿ちて去るも、敗績して

尸を裹んで旋る」というなどの用例がある。後者も恐らく馬援の故事を踏まえた表現であろうが、特に前者は戦死して帰ることを問題にしないと述べており、馬援の故事を強く意識しているだろう。

唐に入っても、李益の「塞下曲」(『全唐詩』卷二八三)に「伏波惟願裹尸還、定遠何須生入關」(伏波は惟だ願う 尸を裹んで還るを、定遠は何ぞ須いん 生きて関に入るを)と明らかに馬援の故事を用いた例などが見られる中で、張籍の友人でもある王建の「送衣曲」(尹占華『王建詩集校注』卷二)に「願身莫著裹屍婦、願妾不死長送衣」(願わくは 身著けて屍を裹んで帰る莫かれ、願わくは 妾死せずして 長く衣を送らん)という例は、この詩と同じく待つ妻の側から述べた例である。

「裹尸(屍)」、杜甫には用例がなく、張籍の例はこれのみ。

この二句は、次の二句と同じ韻でひとまとまりになっている。その前半二句は、ゆるやかな対句で、漢の天子が四方の異民族を平定する裏では、辺境の武將が、死んだ兵士の遺体を包んで帰ってくるものと述べる。漢の時代に舞台設定がなされることによって、虚構性を帯びるとともに、普遍性を持つことになる。ここで言及される戦死する兵士は、夫をいうのではなく一般論であり、四夷平定の影には無名兵士の死はつきものだから、と後の二句に続くのであろう。

「護羌都尉」という実際には存在しなかった官職名が用いられているのは、単なる誤りではなく、ありそうだけれども実際にはない名称を用いることによつて、特定の官職に限定せず普遍性を持たせようという意図であろうか。さらにいえば、妻がうる覚えの状態で、いわば「ナントカ將軍とやらという人が」といった口吻であることを表現しようとしたのかもしれない。妻にとつてはお偉いさんの官職名など、どうでもよいことなのである。

5・6 念君此行為死別、对君裁縫泉下衣

「念君此行為死別」あなたの今回の旅立ちが恐らく死に別れになるだろうことを思う。

「念君」の表現は、3「雜怨」(卷一)に「念君非征行、年年長遠途」(念う 君が征行するに非ざるに、年年 長遠の途にあるを)と、旅に出た夫を思う例があったほか、先に「去万里」の語釈にも引いた前詩33「車遥遥」(前出)にも「山川 処として帰路ならざるは無し、念う 君が長く万里の行を作すを」の句があった。その【語釈】参照。

「此行」、今回の旅立ち、このたびの出征。強く提示した表現といえるだろう。

特に戦攻を指した例が『左伝』に多く見え、例えば宣公十二年の条には「此行也、晋師必敗」(此の行や、晋の師 必ず敗れん)という。

唐までの詩には一例のみ、陶淵明の「飲酒詩二十首」其十(四部叢刊本卷三)にかつての旅を思い出し、「此行誰使然、似為飢所驅」(此の行 誰か然らしむる、飢えの驅る所と為るに似たり)という。

唐に入って用例が多くなり、張九齡の「巡属県道中作」(『全唐詩』卷四七)では自らの巡視の旅について、「春令夙所奉、駕言遵此行」(春令 夙に奉ずる所、駕して言に 此の行に遵う)といい、張潮の「襄陽行」(『全唐詩』卷一一四)では、妻が夫の旅を指して「是君婦、識君情、怨君恨君為此行」(是れ君が婦なれば、君の情を識る、君を怨み君が此の行を為すを恨む)という。

放浪の詩人杜甫には六例あるうち、一例を挙げれば、「入衡州」(『詳註』卷二三)に「此行怨暑雨、厥土聞清涼」(此の行 暑雨を怨む、厥の土 清涼なりと聞く)の句があり、衡州までの旅を振り返り、次の目的地の郴州に思いを馳せる中に用いている。

張籍にもう一例、64「宿臨江駅」(卷二)に自らの旅について「旅宿今已遠、此行猶未歸」(旅宿 今已に遠く、此行 猶お未だ歸らず)という句がある。

「死別」は死に別れ。他の人々と同じように、遺体が包まれて帰ってくるだろうというのであろう。

先にも引いた「古詩為焦仲卿妻作」(前出)に「生人作死別、恨恨那可論」(生人 死別を為す、恨恨 那ぞ論ずべけん)という古い例があるが、唐までの詩においては、他に宋の時の俗謡の例が一例見えるのみ。

唐に入っても初唐には用例がなく、杜甫に至って三例が見える。陳注はそのうちの、「夢李白二首」其一(『詳註』卷七)の冒頭に「死別已吞声、生別常惻惻」(死別 已に声を呑み、生別 常に惻惻たり)という二句の「生別」の句を「死別」として引いている。

張籍以前の例のうちで、大曆頃の趙徵明の「思婦」(『全唐詩』卷二五九)に「寸心寧死別、不忍生離憂」(寸心 寧る死別せん、生離の憂いに忍びず)という例などが男女の死別をいう例である。

張籍の例はこれのみ。

「对君」あなたに対して。あなたに面と向かって。

「君主に答える」という意味では古く『韓非子』にも見えることばだが、詩語としてはあまり用例がなく、唐までの詩においては、「对君子」の例を除けば、先にも引いた謝靈運の「燕歌行」(前出)に「对君不楽淚沾纓、關

「窗開幌弄秦箏」(君に対して楽しまず 涙 縷を沾し、窗を開き 幌を開き 秦箏を弄ぶ)といい、庾信の「擬詠懷詩二十七首」其十六(『庾子山集注』卷三)に「対君俗人眼、真興理当無」(君に対す 俗人の眼、真興 理として無かるべし)という例を見るのみ。

なお、前者は先に引いた部分からも明らかのように、夫と離れている妻の思いを詠じた作であり、その中で「対君」ということに關して、森野繁夫博士『謝康樂詩集』卷下(白帝社、一九九四年)では「實際には夫は遠方にいるので向かい合うことはできない。夫のいる方を眺め続けることを意味するのであるうか」と述べられ、また葉笑雪『謝靈運詩選』(古典文学出版社、一九五七年)は、曹丕の同題の樂府の表現から「思君」に作るべきとし、顧紹柏『謝靈運集校注』(中州古籍出版社、一九八七年)は「対君」とするテキストには従わず、『樂府詩集』が「対酒」に作るのに従う。諸説が生まれているように、夫と離れているのに「対君」を用いたこの例は、特殊な例と見なせよう。

唐に入ると少し例が増え、包融の「酬忠公林亭」(『全唐詩』卷一一四)に「塵念到門尽、遠情対君深」(塵念 門に到りて尽き、遠情 君に対して深し)といい、李白の「将進酒」(王琦注本卷三)に「主人何為言少錢、徑須沽取対君酌」(主人 何為れぞ 錢少なしと言ふ、徑ちに 須く 沽い取りて 君に対して酌まん)というなどの例が見えるようになる。

杜甫に二例あるうち、「新婚別」(『詳註』卷七)に「羅襦不復施、対君洗紅粧」(羅襦 復た施さず、君に対して 紅粧を洗わん)という例は、妻が出征しようとする夫の面前で、という用い方で、ことよく似ている。張籍の用例はこれのみ。

〔裁縫〕ハサミで裁ち針で縫うこと。衣服を作る。

8 「白紵歌」(卷一)に「裁縫長短不能定、自持刀尺向姑前」(裁縫の長短 定むる能わず、自ら刀尺を持ちて 姑の前に向かう)の句が見えた。その【語釈】も参照。そこで触れなかった杜甫の例を引いておこう。杜甫に二例あるうち一例を挙げれば、「白糸行」(『詳註』卷二)に女性が衣服を作る様子を詠じて、「美人細意熨帖平、裁縫滅尽針線跡」(美人細意 熨帖平らかに、裁縫 滅し尽くす 針線の跡)という句がある。

〔泉下衣〕泉は黄泉の泉、あの世。地下にあると思われるので泉下という。そこでの衣というのは、すなわち死に装束。旅立ちに当たって縫う夫の服が、死に装束になるだろうと思ひながら作るというのである。

陳注も引く「古詩十九首」其十三(『文選』卷二九)に「潜寐黄泉下、千

載永不寤」(潜かに黄泉の下に寐ね、千載 永く寤めず)という句があり、李善は服虔の『左伝』の注に「天玄地黄、泉在地中、故言黄泉」(天は玄く地は黄にして、泉は地中に在り、故に黄泉と言ふ)というのを引いている。

他に晋の「懊儂歌十四首」其四(『樂府詩集』卷四五)に「相樂不相得、抱恨黄泉下」(相い樂しみて 相い得ず、恨みを黄泉の下に抱かん)というなどの例があるが、「泉下」でまとまる例は、唐以前には見えないようだ。

唐に入り、宋之問の「息夫人」(『全唐詩』卷五一)に「仍為泉下骨、不作楚王嬪」(仍りて泉下の骨と為り、楚王の嬪と作らず)といい、李白の「門有車馬客行」(王琦注本卷五)に「借問宗党間、多為泉下人」(宗党の間を借問するに、多くは 泉下の人と為る)というなどの例が見えるようになる。ただ「泉下衣」という表現の例は未見。

杜甫には用例がなく、張籍の例はこれのみ。

前の二句の一般論を承け、個別の事情をいう二句で、同じ韻でまとまる。天下平定の影には、無名兵士の死はつきものだから、今回の夫の出征も死に別れとなるだろうと承ける。だから、死に装束と思ひながら、夫の衣裳を縫うのである。

第六句は第四句の「裏尸婦」と呼応した表現であろう。結局死んで帰ってくるのなら、馬援の故事にいう「馬革」のような、その辺にたまたまあったようなもので包まれるのではなく、せめて自分の手で縫ったこの衣を着て帰ってきてもほしいという思いが込められているのではないだろうか。先に引いた王建の「送衣曲」(前出)の妻は、夫が自分の送った衣に包まれて帰ることなく、ずっと無事でいて衣を送り続けられるようにと願っていたが、夫の死を覚悟しているこの詩の妻は、あり合わせのものではなく、自分の作った衣に包まれてほしいと願うのである。

夫の衣裳を縫うということから、夫がすでに従軍していて、辺地の夫に衣を送る、いわゆる「送衣」の詩ととることもできようが、ここでは「対君」の表現から、これから従軍するに際して衣服を縫っていると解釈した。謝靈運の「燕歌行」の例は先述のように特殊な例であるうし、この詩において唯一夫との位置関係を具体的に示すこの「対君」の二字が、特殊な意味で用いられているとは考えにくいからである。

つまりこの詩は妻が夫と向かい合っているという設定であり、以下の六句にわたる妻の思いも、夫に直接語りかけていることになろう。この点については【補】で再び触れることにしたい。

なお、送衣の詩については、赤井益久氏「送寒衣―唐詩『送衣曲』をめぐる―」(『漢文学会々報』三一、一九八七年)に詳しい。10「寄衣曲」【題

【解】参照。

7・8 与君一日為夫婦、千年万歳亦相守

〔与君一日為夫婦〕あなたと一度夫婦となつたからには。

この「一日」を、李樹政注はそのままたつた一日限りの夫婦生活だったと解しているようだが、そこまで限定せず、一旦・一度の意味で解してよいのではないだろうか。古い詩の例は見つけられなかったが、李白の「上李邕」(王琦注本卷九)に「大鵬一日同風起、扶搖直上九万里」(大鵬一日風と共に起れば、扶搖して 直ちに上る 九万里)といい、杜甫の「莫相疑行」(『詳註』卷一四)「憶獻三賦蓬萊宮、自怪一日声烜赫」(憶う 三賦を蓬萊宮に献ずるを、自ら怪しむ 一日 声烜赫たるを)という例などは、この意で解せる例のようである。

なお、張籍には「一日」の用例はもう一例、28「少年行」(卷一)に「斬得名王獻桂宮、封侯起第一日中」(名王を斬り得て 桂宮に献じ、侯に封ぜられ 第を起こす 一日の中)の句が見えた。これは「たつた一日のうちに」の意。

「夫婦」は『周易』序卦伝に「有天地然後有万物、有万物然後有男女、有男女然後有夫婦、有夫婦然後有父子」(天地有りて然る後に万物有り、万物有りて然る後に男女有り、男女有りて然る後に夫婦有り、夫婦有りて然る後に父子有り)云々といひ、陳注も引く『礼記』中庸に「君子之道、造端乎夫婦」(君子の道は、端を夫婦に造む)というなど、古くから常見のことば。

ただ、詩における用例は少なく、唐以前では「古詩十九首」其八(『文選』卷二九)に、「兔糸生有時、夫婦会有宜」(兔糸 生ずるに時有り、夫婦 会するに宜しき有り)と見えるほかは、北魏の高允が彭城の劉氏のために作った詩(『魏書』列女伝)に「爰制夫婦、統業承先」(爰に夫婦を制し、業を統べ先を承く)という例があるくらいのようなだ。

唐に入っても詩における例は少なく、張籍以前には、張説の「安樂郡主花燭行」(『全唐詩』卷八六)に「清歌棠棣美王姬、流化邦人正夫婦」(棠棣を清歌して王姬を美す、化を邦人に流して 夫婦を正さん)というなど三例のみ。そのうちの一例は杜甫の唯一の例、「牽牛織女」(『詳註』卷一五)に「義無棄礼法、恩始夫婦恭」(義は礼法を棄つる無く、恩は夫婦の恭なるより始まる)というものである。

張籍にはもう一例、40「促促詞」(卷一)に「促促復促促、家貧夫婦歡不足」(促促 復た促促、家貧しく 夫婦 歡足らず)という句がある。

〔千年万歳〕千年でも万年でも。永久に。強調の表現である。

「千年」「万歳」はそれぞれ顔見する語。「千年万歳」の形でも、唐以前では隋の煬帝の「四時白紵歌二首」其一「東宮春」(『文苑英華』卷一九三)に「長袖透迤明珠玉、千年万歳陽春曲」(長袖透迤として 珠玉を動かし、千年万歳 陽春の曲)の例が見える(『拾遺記』中の詩の例もあるようだが省いた)。

唐詩においては閻朝隱の「鸚鵡猫兒篇」(『全唐詩』卷六九)に「賢為君兮德為飾、千年万歳兮心軫憶」(賢を君と為し 徳を飾りと為す、千年万歳心軫た憶う)といい、賀知章の「望人家桃李花」(『全唐詩』卷一一二)に「千年万歳不凋落、還將桃李更相宜」(千年万歳 凋落せず、還た桃李と将にして 更に相宜し)というなどの例がある。

杜甫には「千年万歳」の例はないが、先に其一を引いた「夢李白二首」(前出)の其二に「千秋万歳名、寂寞身後事」(千秋万歳の名は、寂寞たる 身後の事なり)という似た例がある。

張籍も「千年万歳」はこの例のみであるが、37「楚宮行」(卷一)に「願君千年万年寿、朝出射麋夜飲酒」(願う 君が千年万年の寿にして、朝に出でて麋を射 夜に酒を飲まんことを)という似た例がある。

〔亦相守〕「守」は、夫の留守を守るということであるが、そこには貞節を守る、結婚の誓いを守るといった、色々な意味も込められているだろう。

「相守」の表現は唐以前の詩では、小説中の詩の例を除けば一例のみ。梁の高爽の「詠鏡詩」(『玉臺新詠』卷五)に「言照常相守、不照常相思」(言に常に相い守るを照らし、常に相い思うを照らさず)といい、夫の留守を守る自分の姿ばかり照らし、夫の姿を映してくれないと詠ずる。

唐詩においては、張籍以前には二例のみ、高適の「秋胡行」(『全唐詩』卷二二三)に「妾家夫婿經離久、寸心誓与長相守」(妾が家の夫婿 離を経ること久しきも、寸心 与に長く相い守るを誓う)といい、李益の「雜曲」(『全唐詩』卷二八二)に「寧從賤相守、不願貴相離」(寧ろ賤にして相い守るに従わん、貴にして相い離るるを願わず)という。前者は秋胡の故事を用いたもので、夫の留守を守る意、後者は貴顕の家に嫁いだ女性の歎きを詠じたもので、身分が高くても離れていることと対にされたこの例は、貧しくとも二人で家を守っていくことを指すか。

杜甫には例がなく、張籍の例もこれのみ。

二句で一韻。一度夫婦となつたからには、永久に守っていくことを誓う二句。「一日」と「千年」「万歳」が対比され、強調されている。ここでは妻

の強い意志が感じられる。ただ、死を予感しながらも帰らぬ夫をひたすら待つという妻の姿は、閨怨詩ではおなじみのもので、伝統的な女性像ということができるだろう。

9・10 君愛竜城征戦功、妾願青楼歌楽同

〔君愛竜城征戦功〕あなたは竜城での戦功を大事にするが。
〔竜城〕は漢代の北方異民族である匈奴の聖地。また「龍城」「籠城」に作る。

李冬生注が『史記』匈奴列伝に「歳正月、諸長小会单于庭、祠。五月、大会龍城、祭其先・天地・鬼神」（歳の正月、諸長 单于の庭に小会し、祠る。五月、大いに龍城に会し、其の先・天地・鬼神を祭る）といい、『漢書』武帝紀に「（衛）青至竜城、獲首虜七百級」（青 竜城に至り、首虜を獲ること七百級）というのを引くように、匈奴の祭祀の場・根拠地であった。

何遜「学古詩三首」其三（『古詩紀』卷九三）に「日隱竜城霧、塵起玉関風」（日は隠る 竜城の霧、塵は起る 玉関の風）といい、隋の盧思道の「従軍行」（『文苑英華』卷一九九）に「朝見馬嶺黄沙合、夕望竜城陣雲起」（朝に見る 馬嶺に黄沙の合するを、夕べに望む 竜城に陣雲の起るを）というなど、唐以前から辺塞詩にしばしば詠じられる。

唐に入っても、竇威の「出塞曲」（『全唐詩』卷三〇）に「潜軍度馬邑、揚旆掩竜城」（軍を潜めて 馬邑を度り、旆を揚げて 竜城を掩う）といい、盧照隣の「戦城南」（『全唐詩』卷四一）に「笳喧雁門北、陣翼竜城南」（笳は喧し 雁門の北、陣は翼く 竜城南）というなど、多くの例があるが、特に著名なのは、陳注・李樹政注も引く王昌齡の「出塞二首」其一（『全唐詩』卷一四三）に「但使竜城飛将在、不教胡馬度陰山」（但だ竜城の飛将をして在らしめば、胡馬をして陰山を度らしめじ）という例であろう。この句については、高橋良行氏に「王昌齡詩札記」『竜城飛将』の解釈をめぐって――（『中国詩文論叢』四、一九八五年）の専論がある。

具体的な場所については諸説あり、その特定は困難である。ただ、この詩においては、古来詩の中で用いられるイメージからここに登場させたに過ぎないであろう。場所はどこでもよいのである。

杜甫には例がなく、張籍の例はこれのみ。

〔征戦功〕、「征戦」は14「別離曲」（卷一）に「不如逐君征戦死、誰能独老空閨裏」（如かず 君を逐いて 征戦して死するに、誰か能く独り老いん空閨の裏）の句があった。その【語釈】参照。なお、「征戦功」の三字で

は、張籍以前に、岑参の「潼関鎮国軍句覆使院早春寄王同州」（『岑参集校注』卷三）に「不見征戦功、但聞歌吹喧」（征戦の功を見ず、但だ歌吹の喧しき

を聞くのみ）という例が一例見える。

〔妾願青楼歌楽同〕わたしは家で歌や音楽を一緒に楽しみたいと願う。

「青楼」は青く塗った楼閣。徐注・李樹政注は、曹植の「美女篇」（『文選』卷二七）に「青楼臨大路、高門結重閣」（青楼 大路に臨み、高門 重閣を結ぶ）という例を引き、もともと女性の居室を指していたが、杜牧の「遣懷」に「十年一觉揚州夢、贏得青楼薄倖名」（十年 一たび覚む 揚州の夢、贏ち得たり 青楼 薄倖の名）というように、後には妓館の意味でも用いられるようになるが、ここは本来の意であることを指摘する。

詩に登場する場合、単に都会の繁華な様子を描くために用いたものを除けば、女性のいる場所ということとは確かであるものの、一般の女性なのか妓女なのか判別しにくいものも多いが、梁の劉邈の「万山見採桑人」（『玉臺新詠』卷八）に「倡妾不勝愁、結束下青楼」（倡妾 愁いに勝えず、結束して 青楼を下る）といい、北周の王褒の「古曲」（『文苑英華』卷二〇七）に「青楼臨大道、遊俠尽淹留」（青楼 大道に臨み、遊俠 尽く淹留す）という例のように、妓館と思われる例も唐以前から見えている。

また、陳の呉尚野の「詠隣女楼上弹琴詩」（『古詩紀』卷一一七）に「青楼誰家女、開窗弄碧弦」（青楼 誰が家の女か、窗を開きて 碧弦を弄する）という例では、女性が音楽を演奏する場所として描かれており、唐に入ってから、陳注が其二の「馳道楊花滿御溝、紅妝縵縮上青楼」（馳道の楊花 御溝に満ち、紅妝 縵やかに縮んで 青楼に上る）という句を引く王昌齡の「青楼曲二首」（『全唐詩』卷一四三）でも、其一には「楼頭小婦鳴箏坐、遙見飛塵入建章」（楼頭の小婦 箏を鳴らして坐し、遙かに見る 飛塵の建章に入るを）と、女性が音楽を演奏する場所として描かれている。王昌齡には「青楼怨」（同前）の作もあり、「香幃風動花入楼、高調鳴箏緩夜愁」（香幃 風に動き 花楼に入り、高調 箏を鳴らして 夜愁を緩うす）という例でも、女性が音楽を演奏する場所として詠じている。なお、省略した後半部分に辺境のことを思ふ部分があり、この女性が夫の帰りを待つ妻であることが分かる。

さらに、李嶠の「汾陰行」（『全唐詩』卷五七）に「昔時青楼对歌舞、今日黄埃聚荆棘」（昔時 青楼 歌舞に對し、今日 黄埃 荆棘に聚まる）といい、崔顥の「渭城少年行」（『全唐詩』卷一三〇）に「章臺帝城称貴里、青楼日晚歌鐘起」（章臺 帝城 貴里と称す、青楼 日晚れて 歌鐘起る）という例などでは、妓館の音楽が演奏される場所としての側面が表現されているよう。

また、唐以前の詩にも「青楼誰家女、当窗啓明月」（青楼 誰が家の女ぞ、窓に当たりて 明月に啓く）と歌い出される北魏の周南の「晚粧」（『古詩紀』

卷一一九)が「願託婦娥影、尋郎縦燕越」(願わくは 婦娥の影に託し、郎を尋ねて 燕越を縦にせん)と結ばれ、陳の江総の「閨怨詩」(『藝文類聚』卷三二)が「寂寂青樓大道辺、紛紛白雪綺窗前」(寂寂たる青樓 大道の辺、紛紛たる白雪 綺窗の前)と始まるように、夫の帰りを待つ女性がいる場所として用いられた用例が見えている。

唐に入ってから、先に触れた王昌齡の「青樓怨」(前出)の他に、孟浩然の「賦得盈盈楼上女」(『全唐詩』卷一六〇)に「夫婿久離別、青樓空望婦」(夫婿 久しく離別し、青樓 空しく婦を望む)といい、屈同仙の「燕歌行」(『全唐詩』卷二〇三)に「金戈玉劍十年征、紅粉青樓多怨情」(金戈玉劍 十年征し、紅粉 青樓 怨情多し)というなど、夫の帰りを待つ場所としての用いられた例がある。

以上のように見ると、「青樓」ということは「繁華な都会の建物」「女性のいる場所(妓館を含む)」「音楽が演奏される場所(妓館を含む)」「女性が夫を待つ場所」といった様々なイメージをまとった詩語であるといえるだろう。

張籍のこの例の場合、女性のいる場所と音楽が演奏される場所というイメージとして用いられており、さらには、夫が去った後には夫を待つ場所というイメージをも帯びているのではないかと思われる。

なお、杜甫には一例、「清明」(『詳註』卷二三)に「金鑿下山紅日晚、牙橋振柁青樓遠」(金鑿 山を下れば 紅日晩れ、牙橋 柁を振れば 青樓遠し)という。これは繁華な様子を表現したもののようだ。

張籍には他に一例、54「望行人」(卷二)に「獨倚青樓暮、煙深鳥雀稀」(独り倚る 青樓の暮れ、煙深くして 鳥雀稀なり)の句がある。これは直前に「無因見辺使、空待寄寒衣」(辺使を見るに因無く、空しく待つ 寒衣を寄するを)という句があり、女性のいる場所・夫を待つ場所として用いられているといえよう。

「歌樂」は歌と音楽。まさに平和の象徴であり、夫が願う「征戦」の対極にあるといえよう。

『礼記』儒行に「歌樂者、仁之和也」(歌樂なる者は、仁の和なり)と見えるなど古くから用いられることば。ただ、詩においては、北魏の温子昇の「涼州樂歌二首」其二(『古詩紀』卷一九)に「但事絃歌樂、誰道山川遠」(但だ 絃歌の樂を事とす、誰か道わん 山川遠しと)というように例は見えるが、「歌樂」の二字でまとまる例は、張籍以前には見当たらないようで、同時代の詩人に至って、白居易の「西樓喜雪命宴」(二四四五)に「歌樂雖盈耳、慚無五袴謠」(歌樂 耳に盈つと雖も、五袴の謠無きを慚ず)というように例が見えるようになる。張籍の例はこれのみ。

百名家集本は「歌樂」に作る。こちらであれば、「古詩十九首」(『文選』卷二九)其四に「今日良宴会、歌樂難具陳」(今日 良宴会、歌樂 具には陳べ難し)といい、劉楨の「公讌詩」(『文選』卷二〇)に「永日行遊戯、歌樂猶未央」(永日 行くゆく遊戯するも、歌樂 猶お未だ央まじず)というなど、詩中にも古くから多くの用例があることば。

唐詩においても、李百薬の「少年行」(『全唐詩』卷四三)に「少年不歌樂、何以尽芳朝」(少年 歌樂せずんば、何を以てか 芳朝を尽くさん)といい、李白の「江夏行」(王琦注本卷八)に「如今正好同歌樂、君去容華誰得知」(如今 正に好し 歌樂を同じうするに、君去れば 容華 誰か知るを得ん)というなどの用例がある。

杜甫には一例、「七月三日、亭午已後、較熱退、晚加小涼、穩睡有詩、因論壯年樂事、戲呈元二十曹長」(『詳註』卷一五)に「少壯跡頗疏、歌樂曾倏忽」(少壯 跡頗る疏にして、歌樂 曾て倏忽たり)と、年老いて若き日の歌樂が消え失せたことをいう。

張籍には他に三例、そのうち38「江南曲」(卷一)に「江南風土歌樂多、悠悠处处經過」(江南の風土 歌樂多し、悠悠として 处处 尽く經過す)という例は、樂府における用例。江南の色々な楽しみを述べたのを承けた結びに用いた例。

二句で一韻。夫と自分の人生観の違いを述べる。あなたは戦場で一旗揚げようと思っているが、私は家で平和に暮らしたい。後半は視覚(色彩)と聴覚(音楽)の表現により、平和で楽しい印象が強調される。仕事や夢に賭ける男性と、つましい幸せを願う女性、いつどこにでもありそうな、人生観の違いである。

このような表現も、李白の同題樂府「妾薄命」(王琦注本卷四)にも「君情与妾意、各自东西流」(君の情と 妾の意と、各自 東西に流る)と見えるなど、しばしば見られるもので、ここで終われば従来の閨怨の詩とあまり変わらないであろうが、この先があることによって、張籍の個性が際立ってくる。

11・12 人生各各有所欲、詎得将心入君腹

「人生各各有所欲」人が生きていく中では、それぞれの人がそれぞれ願うことがある。

陳注はこの句の注に陸機の「招隱詩」(『文選』卷二二)の「富貴苟難図、稅駕從所欲」(富貴は苟に図り難し、駕を税きて 欲する所に從わん)という句を引いている。

「人生」の語、しばしばいわれるように、日本語とニュアンスが少し異なり、人が生まれて、人が生きてという意味を帯びる。古く『春秋』成公二年の『左伝』に「人生実難、其有不獲死乎」(人生 実に難し、其れ死を獲ざる有らんか)とみえる、古くからの常見の語で、膨大な数の用例がある。

この句と似た表現の例を挙げれば、古くは『荀子』礼論に「人生而有欲、欲而不得、則不能無求」(人生まれながらにして欲する有り、欲して得ざれば、則ち求むる無き能わず)といい、また『楚辞』離騷に「民生各有所樂兮、余独好脩以為常」(民生 各おの 樂しむ所有り、余独り脩を好んで以て常と為す)という例を、『文選』では「人生」に作る。

詩においては、王粲の「詠史詩」(『文選』卷二二)に「人生各有志、終不為此移」(人生 各おの志有るも、終に此が為に移らず)といい、孟雲卿の「今別離」(『全唐詩』卷一五七)に「人生各有志、豈不懷所安」(人生 各おの志有るも、豈に安んずる所を懷わざらんや)というなどの例が挙げられる。

杜甫には三十例近い「人生」の語の用例があるうち、「曲江二首」其二(『詩註』卷六)の「酒債尋常行処有、人生七十古來稀」(酒債は 尋常 行処に有り、人生七十 古來稀なり)の句は名高い。

張籍には他に一例、448「懷友」(卷七)に「人生有行役、誰能如草木」(人生 行役有り、誰か能く草木の如からん)という。

「各各」はおのおの・それぞれ。「各」を重ねた表現。

漢の相和歌「烏生」の古辞(『宋書』樂志四)に「人民生各各有壽命、死生何須復道前後」(人民生まれ 各各 壽命有り、死生 何ぞ須いん 復た前後を道うを)といい、「古詩為焦仲卿妻作」(前出)に「執手分道去、各各還家門」(手を執りて 道を分かちて去り、各各 家門に還る)というなどの古い例があるが、これらの恐らく口語に近い用例以降、魏晉から大暦期の詩人まで用例が見当たらないようで、孟郊・元稹ら元和の詩人に至って多くの用例が見えるようになる。いくつか例を挙げれば、孟郊の「蜘蛛諷」(『孟郊詩集校注』卷九)に「万類皆有性、各各稟天和」(万類 皆な性有り、各各 天和を稟く)といい、元稹の「賽神」(『元稹集』卷三)に「主人集隣里、各各持酒樽」(主人 隣里を集め、各各 酒樽を持つ)という。張籍の例はこれのみ。

「詎得將心入君腹」(私の)心(心臓)をあなたの腹の中に入れることはできない。

「詎」は反語を表す。「詎得」で、どうして〜できようか。できないことを強調する表現。

「將」は「以」に同じ。「心」はもともと心臓の象形文字であり、心臓に感情が宿っていたという考えから、いわゆるこころの意味となる。ここでは、「腹」との対比から心臓の意味で解釈すべきであろう。自分の思いを相手のものとし、心を一つにするということ、心臓を相手の腹の中に入れると表現したものである。

非常に生々しく大胆な表現であると思われる。似た表現の例としては、齊澣の「長門怨」(『全唐詩』卷九四)に「將心託明月、流影入君懷」(心を將て 明月に託し、流影 君が懷に入らん)といい、盧仝の「月蝕詩」(『全唐詩』卷三八七)に「徑園千里入汝腹、汝此痴骸阿誰生」(徑園千里 汝が腹に入る、汝 此の痴骸 阿誰か生む)といい、白居易の「卯時酒」(二二三)に「一杯置掌上、三嚙入腹内」(一杯 掌上に置き、三嚙 腹内に入る)という例くらいしか見当たらないようだが、張籍のこの句の生々しさに比べれば、巨大な蝦蟇が月を呑み込むという盧仝の表現さえも、極めておとなしい表現と感ぜられる。

二句一韻でひとまとまり。前の二句を承けて、人それぞれに人生観があるのだから、自分の人生観を相手に押しつけることはできないと結ぶ。いわばあきらめのことばであり、自分を納得させようとするものであるが、自分の心臓を相手の腹の中に入れるという生々しい表現は、強い印象を残している。この点については【補】で再び触れることにしたい。

【補】

一 「妾薄命」の構成

この詩は頻繁に換韻しており、押韻の面からは1・2/3/6/7・8/9・10/11・12の五段に分かれるが、内容の上からは、状況を説明した前半部分(1〜6)と妻の思いを述べる後半部分(7〜12)の二段に分けることができる。

前半部では、冒頭の二句で夫が戦場へ行くことを述べ、続く四句で戦争というものもたらす残酷な運命と、それによりこの別れを死別と覚悟する妻の様子が描かれている。

後半部では、二句ごとに換韻して畳みかけるように妻の思いが語られる。7・8句では夫婦となったからには妻としての務めを果たそうという思いが詠じられ、9・10句では戦功を願う夫と平和な暮らしを願う妻の思いのずれ違いが詠じられている。

それに続く結びの二句が、この詩で最も異彩を放つ部分であろう。夫が戦

場においても空閨を守る妻の姿や、男女の間に埋めがたい溝があることについては、従来の詩の中でもしばしば詠じられてきた。この詩においては、それを承けた最後の二句で、相手の腹の中に自分の心臓を入れることはできないという、フィジカルで生々しい表現がなされている。

二 張籍「妾薄命」の特徴

ここでは張籍のこの詩が多くの「妾薄命」の先行作品の中で、どのように位置づけられるのかについて触れておこう。

【題解】でも触れたように、『樂府詩集』卷六二の「妾薄命」の部分に収められる最も古い例は曹植の二首であるが、曹植の作はいずれも樂府題とはかけ離れた内容になっており、後世の作品が模擬の対象としたのは、梁の簡文帝の作のようである。

- | | | |
|----------|--------|-----------------------|
| 1 名都多麗質 | 名都 | 麗質多く |
| 2 本自持容姿 | 本自 | 容姿を恃む |
| 3 蕩子行未至 | 蕩子 | 行きて未だ至らず |
| 4 秋胡無定期 | 秋胡 | 定期無し(秋胡の故事) |
| 5 玉貌歇紅臉 | 玉貌 | 紅臉歇み |
| 6 長嘔串翠眉 | 長嘔 | 翠眉に串う |
| 7 奩鏡迷朝色 | 奩鏡 | 朝色迷い |
| 8 縫鍼脆故糸 | 縫鍼 | 故糸脆し |
| 9 本異揺舟咎 | 本 | 舟を揺らすの咎めに異なり(齊の蔡姬の故事) |
| 10 何関窃席疑 | 何ぞ | 席を窃むの疑いに関せん(周の越姫の故事) |
| 11 生離誰拊背 | 生離 | 誰か背を拊たん(衛子夫の故事) |
| 12 溘死詎来遲 | 溘死 | 詎ぞ来たること遅し(李夫人の故事) |
| 13 王嬙貌本絶 | 王嬙 | 貌本絶するも |
| 14 踉蹌入氈帷 | 踉蹌して | 氈帷に入る(王昭君の故事) |
| 15 盧姬嫁日晚 | 盧姬 | 嫁日晚く |
| 16 非復少年時 | 復た | 少年の時に非ず(魏の陰升の娘の故事) |
| 17 軋山猶可遂 | 山を軋ずるは | 猶お遂ぐべきも(愚公移山の故事) |
| 18 烏白望難期 | 烏白 | 望みは期し難し(太子丹の故事) |
| 19 妾心徒自苦 | 妾心 | 徒自らに苦しむも |
| 20 傍人会見嗤 | 傍人 | 会ず嗤われん |

この作では一応秋胡の故事を踏まえて蕩子の妻が主人公とされているが、

(一)内に記した通り、後半部分に多くの故事を連ねており、先にも引いた『樂府解題』が「梁の簡文帝の、名都に麗質多しと云うは、良人の返らず、王嬙の遠く聘せられ、盧姬の嫁すること遅きを傷むなり」というように、宮女をも含めた女性のさまざまな悲しみを描いた作といえるようである。

『玉臺新詠』にも収められたこの作品が後の作品の原点となったようで、後の作品は、形式的には五言の作がほとんどであり、内容としては女性のさまざまな悲しみを描くものとなっている。特に唐代に入ってから、崔国輔(五言四句)・武平一(五言二四句)・李百薬(五言八句)・杜審言(五言八句)・李白(五言一六句)の諸作が、いわゆる「宮怨」の作となっており、初盛唐の時期には五言の形式で宮女の悲しみを描くということが定型化していたといえるだろう。

その流れの中で注目されるのは、劉元淑の作である。

- | | | |
|------------|----------|---------------|
| 1 自從離別守空閨 | 離別してより | 空閨を守り |
| 2 遙聞征戰起雲梯 | 遙かに聞く | 征戰 雲梯を起こすを |
| 3 夜夜愁君遼海外 | 夜夜 | 君を愁う 遼海の外 |
| 4 年年棄妾渭橋西 | 年年 | 妾を棄つ 渭橋の西 |
| 5 陽春白日照空暖 | 陽春の白日 | 照らすも空しく暖かく |
| 6 紫燕銜花向庭滿 | 紫燕 | 花を銜み 庭に向かいて滿つ |
| 7 綵鸞琴裏怨声多 | 綵鸞の琴裏 | 怨声多く |
| 8 飛鵲鏡前妝梳斷 | 飛鵲の鏡前 | 妝梳断つ |
| 9 誰家夫婿不從征 | 誰が家の夫婿か | 征に従わざらん |
| 10 心是漁陽別有情 | 心は是れ | 漁陽に 別に情有るべし |
| 11 莫道紅顏燕地少 | 道う莫かれ | 紅顏 燕地に少しと |
| 12 家家還似洛陽城 | 家家 | 還た似る 洛陽城 |
| 13 且逐新人殊未歸 | 且く新人を逐いて | 殊に未だ歸らず |
| 14 還令秋至夜霜飛 | 還た | 秋をして至らしめ 夜霜飛ぶ |
| 15 北斗星前橫度雁 | 北斗星前 | 度雁横たわり |
| 16 南樓月下搗寒衣 | 南樓の月下 | 寒衣を搗つ |
| 17 夜深開雁腸欲絶 | 夜深くして | 雁を開けば 腸絶えんと欲し |
| 18 独坐縫衣灯又滅 | 独り坐して | 衣を縫へば 灯又た滅す |
| 19 暗啼羅帳空自憐 | 暗に羅帳に啼きて | 空しく自ら憐れみ |
| 20 夢度陽關向誰説 | 夢に陽關に度るも | 誰に向かいてか説かん |
| 21 每憐容貌宛如神 | 毎に憐れむ | 容貌 宛として神の如きを |
| 22 如何薄命不勝人 | 如何せん | 薄命の 人に勝えざるを |
| 23 願君朝夕燕山至 | 願わくは君 | 朝夕 燕山より至れ |

24 好作明年楊柳春」 好に作せ 明年 楊柳の春

この作品は七言の古体であることや、出征兵士の妻の立場から詠じられていることが、従来の定型から外れた部分であり、また張籍の作と通ずる部分でもある。この詩の場合、孤独の情を綿々と綴る後半部分に中心があるようだが、興味深いのは中間部分で、夫が帰ってこないのは、出征先に女性がいるのだろうか。と推測した部分である。このような発想は、珍しいものではないだろうか。劉元淑は天宝頃の女流詩人というが、女性ならではの表現といえるかもしれない。

張籍と同時代の詩人においては、孟郊が五言の形式を引き継ぎながら、宮女とは限定されない、捨てられる女性の思いを詠じたり、李端が残す三首の作品の中に、やはり宮女とは限定されない作品や七言の作品が含まれていた。劉元淑のもたらした変化がさまざまに受け継がれている様子がうかがえる。

そういった状況の中で、張籍の場合は七言の形式と出征兵士の妻の思いという点を劉元淑の作品から引き継いでいるわけだが、張籍の作品の新しさとしては二点が挙げられるだろう。

一つは先に述べた非常に鮮烈な結びの二句を工夫した点であろう。

張籍が末尾の二句で印象的な表現をすることについてはこれまでもしばしば触れたが、この詩においても、心臓を相手の腹に入れるという生々しい表現がなされている。同様の表現は、同じく出征兵士の妻の心情を詠じた7「征婦怨」(巻一)のやはり末尾の二句にも「夫死戰場子在腹、妾身雖存如昼燭」(夫は戰場に死して 子は腹に在り、妾身 存すと雖も 昼の燭の如し)と見えたが、この詩においても、強い印象を残す結びとなっているよう。

二つ目は、この妻が夫に向かって直接心情を訴えかけている点であろう。【語釈】でも述べたように、この詩では「対君」の語が用いられており、夫に面と向かって語っていることになっている。出征兵士や旅商人など、長く家を留守にする夫を持つ妻を描いた作品は古来多く作られているが、多くはすでに夫は出かけており、夫の留守宅を守る妻の姿が描かれる。この詩において妻は、夫の出発に際して自分の思いを直接ぶつけており、最後の二句も直接訴えかけられることによりさらに生彩を増そう。この詩の妻は夫の衣裳を作っているが、いわゆる送衣の曲と一線を画した作となっているのも、この点であると思われる。

このように自分の思いを直接夫にぶつける妻としては、古楽府「東門行」(「樂府詩集」巻三七)で、盗賊に身を落とそうとする夫に対し、「他家但願富貴、賤妾与君共餽糜。上用倉浪天故、下当用此黄口兒」(他家は但だ富貴

を願うも、賤妾は 君と共に糜を餽わん。上は 倉浪の天を用ての故に、下は 当に此の黄口の兒を用てすべし)と切々と語りかける例などが挙げられる。しかし、後の文人たちの描く妻の多くは、帰らぬ夫をじっと留守宅で待ち続けながら、その悶々とした気持ちを遠い夫に訴えかけるような女性像であったといえるだろう。

そのような状況の中で注目されるのが、「対君」の【語釈】にも引いた、張籍が敬愛する杜甫の「新婚別」(前出)であろう。嫁いだばかりの妻が従軍する夫に対して自らの思いを綿々と訴えかけるこの作品は、以前のどの同題楽府よりも、さらに大きな影響を張籍の「妾薄命」に与えているといえるかもしれない。

最後に、その杜甫の「新婚別」とこの詩の違いについて触れておこう。

「新婚別」で描かれる妻は、新婚早々夫が突然旅立つこととまどいながらも、先に引いた「羅襦 復た施さず、君に対して 紅粧を洗わん」という句や、末尾の「人事多錯迕、与君永相望」(人事 錯迕多し、君と 永く相望まん)の句からもうかがえるように、結局は従来の閨怨詩の女性と同じように、貞節を守ってじっと待ち続けることを誓っている。つまり「新婚別」では、これまでの「じっと待っている妻」に対して「これからじっと待つ妻」が描かれている、あるいは「じっと待っている妻」ができるまでの過程が描かれているといえよう。この妻は、悲しみを抱きながらも夫を待ち続けることを結局は素直に受け入れており、夫が去った後は、「いつ帰ってくるだろう」という期待・希望を抱きながら夫を待つだろう。その意味では、待つことに積極的な妻であり、妙な言い方だが、夫にとっては安心して置いていける、理想的な妻の姿であるといえよう。

張籍のこの詩の妻も待ち続けることを誓っており、「これからじっと待つ妻」には違いないのだが、夫の死を覚悟している点や、夫が自分の気持ちを分かってくれないのは仕方がないと考えている点などからは、あきらめや絶望が強く感じられる。この妻は、待つことを仕方なく受け入れたのであり、これから先そのあきらめや絶望とともにずっと過していく女性なのである。鈍感な夫ならともかく、普通の夫であれば、残していくのが不安になるような、とても危うい存在といえるのではないだろうか。

膨大な数の作品が伝えられる閨怨詩であるから、簡単に断定することはできないが、このような女性像は、従来の閨怨詩にはあまり見られないものなのではないだろうか。張籍の描く女性が、色々な面で従来の女性像からはみ出すものであることは、14「別離曲」・20「節婦吟」・23「採蓮曲」(いずれも巻一)などの【補】の中で触れてきたが、この詩も同じように斬新な女性

像を提示した作品といえるかもしれない。

(橘)

35 朱鷺

【題解】

朱鷺(あかぎ)『全唐詩』は「鷺」の下に「曲」の字が有ると注記する。『樂府詩集』巻一六に鼓吹曲辞として載録されており、「朱鷺」は漢鏡歌十八曲の第一曲とされている。

『樂府詩集』の解題には次のように言う。

『儀礼』大射儀曰、「建鼓在阼階西、南鼓」。伝云、「建猶樹也、以木貫而載之、樹之附也」。『隋書』樂志曰、「建鼓、殷所作。又棲翔鷺於其上、不知何代所加。或曰、鵠也。取其声揚而遠聞。或曰、鷺、鼓精也。或曰、皆非也。『詩』云、『振振鷺、鷺于飛。鼓咽咽、醉言歸』。言古之君子、悲周道之衰、頌声之息、飾鼓以鷺、存其風流。未知孰是」。孔穎達曰、「楚威王時、有朱鷺合沓飛翔而來舞、旧鼓吹『朱鷺曲』是也」。然則漢曲蓋因飾鼓以鷺而名曲焉。宋何承天「朱路篇」曰、「朱路揚和鷺、翠蓋曜金華」。但盛称路車之美、与漢曲異矣。

『儀礼』大射儀に曰く、「建鼓は阼階の西に在り、鼓を南にす」と。伝に云う、「建は猶お樹のごときなり、木を以て貫きて之を載せ、之を附に樹つるなり」と。『隋書』樂志に曰く、「建鼓は、殷の作りし所なり。又た翔鷺を其の上に棲くは、何れの代に加えられし所なるかを知らず。或いは曰く、鵠なり。其の声の揚がりて遠く聞ゆるを取ると。或いは曰く、鷺は、鼓の精なりと。或いは曰く、皆非なり。『詩』に云う、『振振たる鷺、鷺于に飛ぶ。鼓咽咽として、酔いて言に帰る』と。言うところは古の君子、周道の衰え、頌声の息むを悲しみ、鼓に飾るに鷺を以てし、其の風流を存すと。未だ孰れか是なるを知らず」と。孔穎達曰く、「楚の威王の時、朱鷺の合沓飛翔して来舞す、旧の鼓吹『朱鷺曲』は是れなり」と。然らば則ち漢曲は蓋し鼓を飾るに鷺を以てするに因りて曲を名づくならん。宋の何承天「朱路篇」に曰く、「朱路 和鷺を揚げ、翠蓋 金華を曜かす」と。但だ盛んに路車の美を称するのみにして、漢曲と異なれり。

この解題に拠れば、朱鷺は、建鼓の上に置かれた飾り物を指すようである。建鼓とは、殷代に制作された鼓で、鼓の胴の部分の棒を貫き、その棒を立てて鼓を上に掲げたもの。この建鼓の上に、いつ、どうという理由で、朱鷺が飾

られるようになったかについては、『隋書』音楽志に諸説が紹介されており、或る者は朱鷺は鵠のことで、その鳴き声は遠くまで響くことに由来すると言い、或る者は、鷺が鼓の精霊であると言い、また或る者は『詩経』魯頌「有駟」に基づき、古代の君子が、周の政道が衰えて、頌声が途絶えたことを悲しんで、鷺を鼓に飾ったのだと説明する。また『毛詩』陳風「宛丘」の「値其鷺羽」の孔穎達疏に、戦国楚の威王の時代に、たくさんの朱鷺が飛来して舞ったという瑞兆があり、もとの鼓吹曲「朱鷺」はこのことに由来すると言う。

結局のところ、その由来は明らかではないが、郭茂倩は、漢の鼓吹曲「朱鷺」は、この建鼓に飾られた朱鷺に基づいてその曲名が付けられたのであると推測している。

漢の古辞は、その内容を今ひとつ明瞭にしがたいが、吉川幸次郎「短箫铙歌について」(全集巻六、筑摩書房、一九七四年)は、鷺に対する問いかけの歌と解するようであり、小尾郊一・岡村貞雄『古樂府』(東海大学出版会、一九八〇年)は、鏡が鷺に問いかけ、鷺がその問いに答えた歌とする。

この漢の古辞に続くのが、三国魏に始まる各王朝の鼓吹曲である。『樂府詩集』巻十八・十九には、魏鼓吹曲十二曲(繆襲作)・呉鼓吹曲十二曲(韋昭作)・晋鼓吹曲二十二首(傅玄作)の各王朝の鼓吹曲辞、及び何承天が制作した宋鼓吹铙歌十五首が収められ、また巻二〇には、梁鼓吹曲十二首(沈約作)、更には唐の鼓吹铙歌十二首(柳宗元作)が収録されている。『隋書』音楽志上に拠れば、北齊にも鼓吹曲二十曲があったようであるが、歌辞は現存しない。

この各王朝の鼓吹曲は、いずれも王朝の建国物語を順に歌いつづるものであり、漢の古辞や朱鷺と内容的な関連はない。例えば魏の鼓吹曲の第一曲「初之平」を、『宋書』樂志四は、漢の第一曲「朱鷺」に相当すると言うけれども、その内容は、後漢末に天下が大いに乱れたとき、武帝曹操が旗揚げして、天下を平らげたことを詠んだものである。また何承天の宋鼓吹曲の第一曲「朱路篇」は、「朱鷺」を「朱路」(皇帝の大車)と読み替え、皇帝の威徳が広く及ぶことを述べるものである。

このように、三国から宋の各王朝の鼓吹曲が、朱鷺との関連が希薄であるのに対して、梁陳の文人の同題樂府は、「朱鷺」を主題としたものとなっている。

『樂府詩集』巻一六鼓吹曲辞一には、次のように六朝の作例を五例、唐代は張籍のみを載せる。

梁・王僧孺／裴憲伯
陳・後主／張正見／蘇子卿
唐・張籍

まず梁の王僧孺は、君主の庇護を求めて、その恩愛を願う「朱鷺」の思いを詠み、同じく梁の裴憲伯は、秋に寒苦を懼れて南に去る「朱鷺」に、君主の恩愛が尽きて、その庇護を失った悲しみを重ね合わせる。これに対して、陳の後主は、「朱鷺」が谷川の隈に徘徊することを詠み、彼らが群れ集まっているのに、それにふさわしいゆつたりとした川の流れが無いことを憂えるようである。陳の張正見は、金堤に佇んで滄海を望む「朱鷺」が、古くから重んじられてきたこと、その一方で潮に翻弄されるようなことも有ったその経歴を詠み、陳の蘇子卿は玉山の「朱鷺」が君恩に感じて上林苑に飛来したことを詠んでいる。

張籍の「朱鷺」もこの梁陳の「朱鷺」の系譜に入るようであり、そのことについては、【補】の部分において触れることとしたい。

なお六朝以前の「朱鷺」については、漢文研究会(詩班)「漢文の教材研究(二)——六朝樂府「朱鷺」五首——」(『漢文教育』第二六号、二〇〇一年)に解釈と分析がある。

【本文・書き下し文】

- 1 翩翩兮朱鷺 翩翩たり 朱鷺
- 2 來汎春塘棲綠樹 来たりて春塘に汎び 緑樹に棲る
- 3 羽毛如翦色如染 羽毛は翦るが如く 色は染むるが如し
- 4 遠飛欲下雙翅斂 遠く飛び 下らんと欲して 双翅斂む
- 5 避人引子入深塹 人を避け 子を引きて 深塹に入るも
- 6 動處水紋開盪盪 動く処 水紋開きて 盪盪たり
- 7 誰知豪家網爾軀 誰か知らん 豪家 爾が軀を網すと
- 8 不如飲啄江海隅 江海の隅に飲み啄むに如かず

【口語訳】

- 1 ひらりと軽やかに飛ぶ朱鷺
- 2 春の池塘に舞いおりて水面に漂ったり 青々と茂る樹で休んだりしている
- 3 その羽毛はまるで切り揃えたようで その色は染めたかのように美しい
- 4 遠くから飛んできて しばし休もうとして 今はその双翼を収めている
- 5 人間を避け雛鳥をつれて 谷の奥深くに身を潜めているけれども

- 6 動けばきらめく波紋が生じて 周囲に広がってゆく
- 7 近くの金持ちが おまえを捕まえようと網をかけるかもしれない
- 8 もっと遠い海辺の片隅で 貧しくとも拘束されない暮らしを送りなさい

【押韻】

鷺——去声十一暮・樹——去声十遇(『広韻』同用)

染・斂・塹・盪——去声五五艶

軀・隅——上平十虞

【語釈】

1・2 翩翩兮朱鷺、來汎春塘棲綠樹

〔翩翩〕軽やかに飛ぶさま。

古くは『毛詩』小雅「四牡」に「翩翩者騅、載飛載下、集于苞栩」(翩翩たるは騅、載ち飛び載ち下り、苞栩に集う)と、騅が飛び下るさまを言う。

陳注は、魏文帝「与呉質書」(『文選』卷四二)の「元瑜書記翩翩、致足樂也」(元瑜は書記翩翩として、致樂しむに足るなり)を引き、ここは朱鷺の美しさを言うとして解するようである。

唐以前の用例には、魏文帝のような例とは別に、群れから離れた寄る辺なもの状態を言う例も多く、例えば王粲「從軍詩五首」其三(『文選』卷二七)には「蟋蟀夾岸鳴、孤鳥翩翩飛」(蟋蟀は岸を夾みて鳴き、孤鳥は翩翩として飛ぶ)と夕暮れに飛ぶ孤独な鳥の姿を形容する語として用いる。

唐詩の用例も多く、初唐の例としては、褚亮「秋雁」(『全唐詩』卷三二)。注云「一作虞世南詩」に「為有伝書意、翩翩入上林」(書を伝うる意有るが為に、翩翩 上林に入る)と、秋雁が手紙を届ける為に上林苑に飛来することを言う。また李適「餞唐永昌赴任東都自尚書郎為令」(『全唐詩』卷七〇)に「聞道飛鳧向洛陽、翩翩矯翮度文昌」(聞道く飛鳧 洛陽に向かい、翩翩翮を矯げて文昌に渡る)と、鳥の力強く飛ぶさまを言う例も見える。

杜甫の用例は一例のみ、「鄭典設自施州歸」(『詳注』卷二〇)に「翩翩入鳥道、庶脱蹉跌厄」(翩翩 鳥道に入り、庶わくは蹉跌の厄より脱せんことを)とあり、山道を輿に乗って、鳥と同じように軽やかに進むさまを言う。

張籍の用例は三例、445「董公詩」(卷七)に「翩翩者蒼鳥、來巢於林叢」(翩翩たるは蒼鳥、来りて林叢に巢く)と『毛詩』を踏まえて蒼鳥が飛来するさまを言い、133「送李騎曹靈州歸觀」(卷二)に「翩翩出上京、幾日到辺城」(翩翩と上京を出で、幾日か辺城に到らん)と、李騎曹が靈州の両親のもとへ行くために、軽やかに出立するさまを言う。

〔兮〕語調を整える助字。

張籍詩にはこの一例だけ。「朱鷺」と同じように、第一句を五言句、第二句以降を七言句とするものには、39「鳥夜引」（巻一）と40「促促詞」（巻一）などがある。

〔朱鷺〕鼓吹曲の「朱鷺」については【題解】を参照。

李樹生・李冬生は、朱鷺をトキ（学名「ニッポニア・ニッポン」）であるとする。トキは、別名「鷓」、また「紅鶴」とも呼ばれる、羽は白くて微かにピンク色を帯びており、顔が赤くまた脚が長く赤い。沼沢や河湖の近辺で生活し、夏から秋にかけては北方で繁殖し、秋から冬にかけては南に飛来する。

また【題解】にも引いた『毛詩』陳風「宛丘」の孔穎達疏に「楚威王時、有朱鷺合沓飛翔而來舞、則復有赤者。旧鼓吹朱鷺曲是也。然則鳥名、白鷺赤者少耳」（楚の威王の時、朱鷺の合沓^{あつま}飛翔して来たり舞えば、則ち復た赤き者有り。旧の鼓吹朱鷺曲は是れなり。然らば則ち鳥の名にして、白鷺の赤き者は少^{すくな}きのみ）とある。朱鷺は色が赤い鷺と考えられており、数が少ないために稀少な鳥として珍重されたようである。

唐以前の用例は少なく、梁元帝の「赴荊州泊三江口」（『文苑英華』巻二八九）に「暈鼓随朱鷺、長簫応紫駟」（暈鼓は朱鷺に随い、長簫は紫駟に応ず）と鼓吹曲の「朱鷺」と横吹曲の「紫駟馬」を対して用いる例が見える。

唐詩に入っても用例は十数例と少なく、いずれも楽曲の名として用いられている。例えば虞世南「門有車馬客」（『全唐詩』巻三六）に「白鶴随飛蓋、朱鷺入鳴笳」（白鶴は飛蓋に随い、朱鷺は鳴笳に入る）と、豪華な行列のうち「朱鷺」が演奏されることを言う。そのなかで、顧況の「送使君」（『全唐詩』巻二六六）に「他日思朱鷺、知從小苑飛」（他日 朱鷺を思わば、小苑より飛ぶを知る）と、朱鷺を宮苑から飛び立った鳥として用いる例がある。杜甫詩には用例はなく、張籍の詩にも他に用例はない。

〔来汎〕朱鷺が水辺に舞い降り、のどかに水面に漂うことを言う。

唐詩以前の用例は見当たらず、唐詩には張九齡の一例があるのみ。張九齡「東湖臨泛餞王司馬」（『全唐詩』巻四八）に「聊乘風日好、来汎芰荷香」（聊か風日の好きに乘じ、来たりて芰荷の香に汎ぶ）と、のどかな船遊びを言う。なお『全唐詩』に「汎」を「一作浴」と注す。「来浴」の用例は張籍以前は見つからない。

〔春塘〕春のつつみ。閑静な住居の庭園や長閑な郊外の水辺を指し、繁華な

所から少し離れた所をイメージさせるようである。ここでは、或いは後の「豪家」の別荘の庭園内、又はその周辺の池塘のことか。

唐詩以前では、齊梁の頃から用例が見えはじめ、陳注の引く沈約「詠湖中雁」（『文選』巻三〇）に「白水滿春塘、旅雁每迴翔」（白水は春塘に満ち、旅雁は毎に迴り翔ぶ）とある。

唐詩の用例は初唐には見えず、盛唐から中唐にかけて用例が増える。儲光義の「閨居」（『全唐詩』巻一三八）に「步欄滴餘雪、春塘抽新蒲」（步欄餘雪を滴らし、春塘 新蒲を抽んず）と、人が訪れることも少ない閑かな住居の園中のさまを詠む。韋忠物の詩には三例の用例があり、それらはいずれも滁州刺史の時の作とされる。「池上懷王卿」（『韋忠物集校注』巻六）は「幽居捐世事、佳雨散園芳。入門靄已綠、水禽鳴春塘」（幽居 世事を捐て、佳雨 園芳を散らす。門を入れば靄は已に緑にして、水禽 春塘に鳴く）と、幽居の庭園内のようなすを詠み、「春遊南亭」（『韋忠物集校注』巻七）に「川明氣已變、巖寒雲尚擁。南亭草心綠、春塘泉脈動」（川明らかにして氣已に變じ、巖寒くして雲は尚お擁う。南亭は草心緑にして、春塘は泉脈動く）とあり、その庭園或いはその近郊の様子を詠む。また「對春雪」（『韋忠物集校注』巻八）では「春塘看幽谷、栖禽愁未去」（春塘 幽谷を看、栖禽 愁いて未だ去らず）とあり、これは雪が残る山麓の様子を詠むようである。

このほかに洛陽内の春の様子を詠んだものとして、白居易「洛中春遊呈諸親友」（三〇六四）に「春樹花珠顫、春塘水麴塵」（春樹 花の珠顫、春塘 水の麴塵）とある。

杜甫に用例はなく、張籍もこの一例のみである。

なお陳注は、陳・張正見「朱鷺」（『文苑英華』巻二〇六）の「金堤有朱鷺、刷羽望滄瀛」（金堤に朱鷺有り、羽を刷いて滄瀛を望む）を引く。「金堤」の「金」は堅固なという意味もあるが、ここは堤の美称。張衡「西京賦」（『文選』巻二）には昆明地を囲む堤を「金堤」と言う。梁・王僧孺「朱鷺」（『文苑英華』巻二〇六）の冒頭に「因風弄玉水、映日上金堤」（風に因りて玉水を弄び、日に映えて 金堤に上る）とあり、結びに「願識昆明路、乘流飲復棲」（願わくは昆明の路を識り、流れに乗りて飲み復た棲らん）とあるのは、「金堤」と「昆明池」との関連を意識するようである。また蘇子卿「朱鷺」（『文苑英華』巻二〇六）も「欲向天池飲、還遶上林飛。金堤曬羽翮、丹水浴毛衣」（天池に向かい飲まん欲するも、還て上林を遶りて飛ぶ。金堤に羽翮を曬し、丹水に毛衣を浴す）と、上林苑に舞いおりた朱鷺が金堤に佇むことを言い、六朝の「朱鷺」では、朱鷺がやどり、佇む場所を「金堤」とするものが多い。

このように「金堤」が宮苑の内部またはその周辺の場合を指すのに対して、

「春塘」はそのような所から少し離れた閑静な場所を言うようである。

「棲緑樹」「棲」はやどる。憩う。「緑樹」は青々と茂った春の樹木。

唐以前の用例としては、宋・吳邁遠「陽春曲」(『玉臺新詠』卷四)に「緑樹揺雲光、春城起風色」(緑樹 雲光に揺れ、春城 風色を起す)と、春の景物としての用例が見える。

『全唐詩』の用例は多く、初唐では王勃「臨高臺」(『全唐詩』卷五五)に「赤城映朝日、緑樹揺春風」(赤城 朝日に映え、緑樹 春風に揺れたり)とある。また李嶠「五月奉教作」(『全唐詩』卷五八)に「緑樹炎氛滿、朱樓夏景長」(緑樹 炎氛滿ち、朱樓 夏景長し)と、初夏の景物としても用いる。

陳注が引く李白「宮中行樂詞八首」其五(王琦注本卷五)には「緑樹聞歌鳥、青樓見舞人」(緑樹に歌鳥を聞き、青樓に舞人を見る)とあり、春の鳥のさえずりが緑樹の間に聞こえることを言う。また孟浩然「過故人莊」(『全唐詩』卷一六〇)に「緑樹村辺合、青山郭外斜」(緑樹 村辺に合し、青山 郭外に斜めなり)と郊外の村落周辺の景物として詠む。

中唐に入っても、顧況「送大理張卿」(『全唐詩』卷二六六)に「白沙洲上江籬長、緑樹村辺謝豹啼」(白沙 洲上 江籬長く、緑樹 村辺 謝豹啼く)と、村の周囲の樹林から鳥の声が聞こえることを言う。

冒頭の二句は、春の緑あふれる時期に、朱鷺が閑静な庭園の周辺に舞い降りてきたことを言う。「翩翩」「来汎」という語句から、春の池堤でゆったりとのびやかに暮らす朱鷺の姿が想像できる。なお李樹政は、『毛詩』魯頌「有駟」(【題解】参照)を引き、この二句は朱鷺を君子・賢人に喩えるのだと解釈する。

3・4 羽毛如翦色如染、遠飛欲下双翅斂

「羽毛」鳥の羽毛。鳥の羽毛はその鳥の能力や価値を示すものとして用いられ、時にそれが人物の能力を比喻する場合もある。

古楽府「双白鵠」(『玉臺新詠』卷一)に「吾欲負汝去、羽毛日摧頽」(吾は汝を負いて去らんと欲するに、羽毛 日に摧頽す)と、白鵠が病気の伴侶を助けるほどの体力が残っていないことを羽毛の消耗によって表し、張華「鷓鴣賦」(『文選』卷十三)に「然皆負贈嬰繖、羽毛入貢。何者、有用於人也」(然れども皆な 贈を負い繖に嬰り、羽毛は貢に入る。何となれば、人に用有ればなり)と、鷓鴣は羽毛が人にとって価値が有るために捕らえられるこ

とを言う。また梁の何遜「贈江長史別詩」(『何遜集校注』卷二)に「安得生羽毛、從君入宛許」(安んぞ羽毛を生じ、君に従いて宛許に入るを得ん)と、江長史に従って宛・許の地に行くための羽毛を欲することを言う。

唐詩にも用例は多く、張九齡「二弟宰邑南海見群雁南飛因成詠以寄」(『全唐詩』卷四七)に、「小大每相從、羽毛當自整」(小大 毎に相從い、羽毛當に自ら整ふべし)と、大小の雁が仲良く飛ぶうちにその羽毛が次第に整えられ、二弟も成長することを言う。

張籍の用例はこの一例のみだが、杜甫の用例は七例あり、陳注の引く「八月十五夜月二首」其一(『詳注』卷二〇)は「水路疑霜雪、林棲見羽毛」(水路 霜雪かと疑い、林棲 羽毛を見ず)と、林にやどる鳥たちの羽が満月の光に照らされて見えることを詠む。このほかに、「奉酬薛十二丈判官見贈」(『詳注』卷一九)に「西來有好鳥、為我下青冥。羽毛淨白雪、慘澹飛雲汀」(西より来たる好鳥有り、我が為に青冥より下る。羽毛 白雪より淨く、慘澹として雲汀に飛ぶ)と、薛君を西來の好鳥にたとえて、その素晴らしさを羽毛の白さによって表す。

また中唐では、韓愈「南山有高樹行贈李宗閔」(『繫年集釈』卷一二)に「不知何山鳥、羽毛有光輝」(知らず何山の鳥か、羽毛に光輝有り)と、これも李宗閔を鳥にたとえて、その素晴らしさを羽毛の輝きによって表す。

〔如翦〕朱鷺の羽毛が切り揃えたように美しく整えられていることを言う。

〔翦〕は剪に同じ。きる。

韓愈「詠雪贈張籍」(『繫年集釈』卷二)に「片片如翦、紛紛碎若按」(片片 勻しきこと翦るが如く、紛紛 碎くこと按つが如し)と、雪片が、まるで切り揃えたように大きさが等しいことを言う。

張籍に「如翦」の用例は他にないが、349「崔駙馬養鷓鴣」(卷六)に「求得鶴來教翦翅、望仙台下亦將行」(鶴の來たるを求め得て翅を翦らしめて、望仙台の下 亦た將に行かん)とあり、「翦」を鳥の羽をきる意に用いる。

なお、李冬生・李建昆は、『玉篇』の「翦、采羽也」を引いて鮮やかに飾られた羽と解するようであり、李樹生は、羽毛が丹念に切り整えたようにそるって美しいことを言うと言解する。いまは韓愈と張籍の用例により、後者に従う。

〔色如染〕朱鷺の羽毛が染めたようにその色が鮮明であることを言う。

「色如」は、梁の王僧孺「朱鷺」(『文苑英華』卷二〇六)に「未能声似鳳、聊变色如珪」(未だ声の鳳に似る能わざるも、聊か色の珪の如きを変ず)とあり、朱鷺が君主に気に入られるために、珪のような白からその羽毛を赤に

変えたとある。また湘東王繹「春別応令詩四首・昆明夜月」(『玉臺新詠』卷九)に「昆明夜月光如練、上林朝花色如霰」(昆明の夜月 光は練の如く、上林の朝花 色は霰の如し)とあり、これは朝花の色ばかりはなく、その姿も形容するようである。

唐詩では張九齡「洛陽主簿叔知和駟承恩赴選伏辭」(『全唐詩』卷一五〇)に「官柳陰相連、桃花色如醉」(官柳は陰相連なり、桃花は色醉えるが如し)と桃花の色をまるで酔ったかのようだと云う。

杜甫には「茅堂檢校收稻二首」其一(『詳注』卷二〇)に一例用例があり、「無勞映渠碗、自有色如銀」(渠の碗に映ずるを勞する無く、自ら色の銀の如き有り)と、收穫された米が銀のように白いことを云う。

張籍の用例は三例。86「答僧拄杖」(卷二)は桂杖の色を銀のようだと云い、340「玉仙館」(卷六)は「長溪新雨色如泥、野水陰雲尽向西」(長溪新雨色泥の如く、野水陰雲 尽く西に向かう)と、溪谷に雨が流れ込んで泥のように濁るさまを詠む。

「如染」の張籍の以前の例は見当たらないが、王維「輞川別業」(趙本卷一〇)に「雨中草色綠堪染、水上桃花紅欲然」(雨中の草色 緑にして染むるに堪え、水上の桃花 紅にして然えんと欲す)と「堪染」の例があり、雨を帯びる草の色、その緑が染めあげたかのようにであることを云う。

また張籍の379「春別曲」(卷六)にも「長江春水綠堪染、蓮葉出水大如錢」(長江の春水 緑にして染むるに堪え、蓮葉は水より出で大きさ錢の如し)とある。

「堪染」はその色が鮮やかであるとともに、斑が無く一色であることもいふようであり、「如染」も朱鷺の羽毛の色がむら無く鮮やかであることを云うと考えても良いであろう。

「遠飛欲下」遠くに飛びゆく朱鷺がしばし休むために舞い降りてきたことを云う。

先に「春塘」の語釈に引いた陳の蘇子卿「朱鷺」(『文苑英華』卷二〇六)にも「天池に向かいて飲まん」と欲し、還つて上林を遶りて飛ぶ」と、天地に向かつて飛んでいた「朱鷺」がしばし上林苑を訪れることを云う。

「遠飛」の唐詩以前の詩の例は少なく、蘇武「詩四首」其二(『文選』卷二九)に「願為双黃鵠、送子俱遠飛」(願わくは双黄鵠と為り、子を送りて俱に遠く飛ばん)と遠く飛びゆくことを願うことを云う。

唐詩にも十数例しか用例が無く、遠く飛び立とうとする例が多い。初唐では王績「古意六首」其六(『全唐詩』卷三七)に「問鳳那遠飛、賢君坐相望」(鳳に問う 那んぞ遠く飛ぶ、賢君 坐ろに相望む)と、遠くに飛び立とう

とする鳳凰にその理由を問う。また李白「賦得白鷺鷥送宋少府入三峽」(王琦注本卷一八)に「人驚遠飛去、直向使君灘」(人は驚く遠く飛び去りて、直に使君灘に向かうを)と、白鷺鷥が遠く飛びゆくことを詠む。杜甫には例は無く、張籍もこの一例のみである。

中唐では、孟郊に二例あり、いずれも遠く飛びゆく(ことがない)ことを詠む。一例を挙げれば、孟郊「遠遊」(『孟郊集校注』卷一)に「何不遠飛去、蓬蒿正繁新」(何ぞ遠く飛び去らざる、蓬蒿 正に繁新なり)と、黄雀に對して心変わりした主人のもとから飛び去るべきと云う。

「欲下」は、朱鷺がしばしの休息を求めて下に降りてきたことを云う。

唐詩以前の詩の例は少ないが、唐詩には用例も多く、杜甫にも一例あり、それは雪が降らんとすることを云う。これを鳥に用いる例は少なく、錢起「和劉明府宴泉前山亭」(『全唐詩』卷二三九)に「翔鸞欲下舞、上客且留杯」(翔鸞 下りて舞わんと欲す、上客 且く杯を留めよ)と、宴席に鸞が舞いおりてくることを言い、また韓愈「鳴雁」(『繫年集積』卷一)に「徘徊反顧群侶遠、哀鳴欲下洲渚非」(徘徊反顧するも群侶遠い、哀鳴して下らんと欲するも洲渚非なり)と、群れからはぐれた雁が、下に降りようとしても休むべき洲渚が見当たらないことを云う。

「双翅斂」「双翅」は二枚の翼のこと。力強く飛ぶ鳥の姿を示すものであり、ここではその翼を斂めて、休息していることを云う。

「双翅」の唐以前の用例には、傅玄「鬪鷄賦」(『初学記』卷三〇)に「高膺峭峙、双翅齊平。躍身竦体、怒勢橫生」(高膺は峭しく峙ち、双翅は齊しく平らか。身を躍らせ体を竦い、怒勢は横生す)とあり、夏侯湛「觀飛鳥賦」(『藝文類聚』卷九〇)に「攝双翅以高舉、舒修頸以儻伴」(双翅を攝えて以て高く挙がり、修頸を舒べて以て儻伴)とある。前者は鬪鷄が両のつばさを広げて相手を威嚇するさまを、後者は翼を広げて高く飛び上がるさまを云う。

唐詩では中唐に例があり、劉禹錫「和浙西李大夫霜夜對月聽小童吹簫策歌」(『箋註』外集卷七)に「思婦多情珠淚垂、仙禽欲舞双翅起」(思婦は情多くして珠淚垂れ、仙禽は舞わんと欲して双翅起る)と、箏の奏する曲を形容して、仙禽(鶴)が翼を広げて舞い始めようとすることを云う。

「斂(斂)翼」の用例は、潘岳「寡婦賦」(『文選』卷一六)に「雀群飛而赴楹兮、鷄登棲而斂翼」(雀は群れ飛びて楹に赴き、鷄は棲に登りて翼を斂む)と、鷄が巢で休息するさまを云う。また庾信「與侍郎曹長思書」(『文選』卷四二)に「薄援助者、不能追參於高妙、復斂翼於故枝、塊然獨處、有離群之志」(援助に薄き者は、高妙を追参する能わず、復た翼を故枝に斂めて、塊然

として独り処り、離群の志有り」とあり、頼るべき有力者もなく、飛翔することをやめて、もとの枝に戻って独居することを言う。

「斂翅(翼・羽)」の用例は初唐には見当たらず、盛唐では王昌齡「詠史」(『全唐詩』卷一四一)に「明夷方濟世、斂翼黃埃昏」(明夷 方に世を濟わんとし、翼を黃埃の昏に斂む)と、混乱の時期に雌伏する人物を詠む。

杜甫の例は一例、「別贊上人」(『詳注』卷八)に「馬嘶思故壘、歸鳥尽斂翼」(馬は嘶きて故壘を思い、歸鳥は尽く翼を斂む)と夕暮れ時に巢に宿る鳥の様子を言う。

冒頭二句を受けて、遠くから飛んできた朱鷺の羽毛の美しく鮮やかなさまを言い、その翼をいまはしばらく収めていることを言う。遠く飛ぶ力を持ちながら、しばしこの春塘のあたりにとどまっていることを言う。

5・6 避人引子入深壑、動処水紋開澹澹

〔避人〕 人間を避ける。

『論語』微子篇の桀溺が子路に問う言葉に、「滔滔者天下皆是也。而誰以易之。且而与其從辟人之士也、豈若從辟世之士哉」(滔滔たるは天下皆是れなり。而して誰か以て之を易せん。且つ而は其の人を辟くるの士に従うよりは、豈に世を辟くるの士に従うに若かんや)とある。

唐詩以前の用例は少なく、陳の江総「至徳二年十一月十二日界徳施山齋三宿決定罪福懺悔詩」(『広弘明集』卷三〇)に「通簡避人物、偃息還山林」(通簡にして人物を避け、偃息して山林に還る)とある。

唐に入っても初唐には用例がなく、杜甫「晚出左掖」(『詳注』卷六)に「避人焚諫草、騎馬欲雞棲」(人を避けて諫草を焚き、馬に騎れば雞棲ならんと欲す)と、人目を避けてひそかに書類を焼くことのあるのが早い例である。張籍の用例はこれのみ。

〔引子〕 雛鳥をひきつれてゆく。

唐詩以前の用例は見当たらず、唐詩の用例も少なく、張籍の用例はこれのみである。

杜甫には用例が三例あり、「晴二首」其二(『詳注』卷一五)に「啼鳥争引子、鳴鶴不帰林。下食遭泥去、高飛恨久陰」(啼鳥 争いて子を引き、鳴鶴は林に帰らず。下りて食べては泥に遭いて去り、高く飛びては久しく陰るを恨む)と、長雨が続き鳥たちは子を引き連れて餌を求めざるさまを詠み、「解悶十二首」其一(『詳注』卷一七)も「山禽引子哺紅果、溪友得錢留白魚」(山禽は子を引きて紅果を哺み、溪友は錢を得て白魚を留む)と山の鳥が雛鳥を

連れ餌を食べるさまを詠み、「到村」(『詳注』卷一四)に「蛟龍引子過、荷芰逐花低」(蛟龍は子を引きて過ぎ、荷芰は花に逐いて低る)と、『西京雜記』の故事を踏まえ、雨が多くて村の周囲はひどくぬかるんでいるので、蛟龍が九子を引き連れて通りすぎるといふ。

〔入深壑〕 「深壑」は深い堀のような谷。朱鷺が人との接触を避け、深い谷川に隠れて暮らすことを言う。

『史記』項羽本紀に「楚擊漢軍、大破之。漢王復入壁、深壑而自守」(楚は漢軍を撃ち、大いに之を破る。漢王復た壁に入り、深く壑りて自ら守る)とあり、敵の攻撃をふせぐために深く掘られた壑壕を言う。

唐詩以前の詩に用例は見当たらず、唐詩も張籍のこの一例と、陳注が引く韓愈の次の一例のみである。韓愈「啄行」(『繫年集積』卷六)に「宵宵深壑、其壑甚完。彼寧可隳、此不可干」(宵宵たり深き壑、其の壑甚だ完し。彼は寧ろ隳るべくも、此は干すべからず)とあり、客を拒絶して暮らす生活は、深い堀や垣根以上に犯すことができないものであることを言う。

また杜甫には「壑」の用例が一例あり、「客居」(『詳注』卷一四)に「下壑万尋岸、蒼濤鬱飛翻」(下の壑は万尋の岸、蒼濤は鬱として飛翻す)と住居の前の切りたつた崖を「下壑」といい、その下に波が激しく奔騰するさまをいう。

張籍の「壑」の用例は二例、44「西樓望月」(卷二)では月の光に照らされる水堀を、62「古苑杏花」(卷二)ではくぼんだ穴をいう。

〔動処〕 水に浮かぶ朱鷺の動くところ。

陳後主「七夕宴楽脩殿各賦六韻」(『古詩紀』卷九八)に「笑靨人前斂、衣香動処来」(笑靨は人の前に斂め、衣香は動きし処より来たる)とあり、女性が動くとその衣香が辺りに香ることをいう。

唐詩の用例は、初唐・盛唐にはなく、中唐の常袞「詠玫瑰花」(『全唐詩』卷二五四)『全唐詩』卷二七九は盧綸「奉和中書李舍人昆季詠寄徐郎中之作」(とする)に「密来驚葉少、動処覺枝長」(密かに来たりて驚葉少なく、動く処は枝の長きかと覺ゆ)とある。

杜甫に用例はなく、張籍もこれ一例のみ。

〔水紋〕 朱鷺の動きが起こす波紋。

梁元帝「晚景遊後園詩」(『藝文類聚』卷六五)に「日移花色異、風散水紋長」(日は移りて花色異なり、風は散りて水紋長し)とある。

唐詩の用例は多く、陳注の引く韓愈「新亭」(『繫年集積』卷八)に「水文

浮枕簾、瓦影蔭龜魚」(水文 枕簾を浮かべ、瓦影 龜魚を蔭う)とあり、李約「江南春」(『全唐詩』卷三〇九)は、春の池塘に波紋が生じるさまを「池塘春暖水紋開、堤柳垂絲間野梅」(池塘 春暖かにして水紋開き、堤柳の垂絲 野梅を間う)と言う。

杜甫の用例はなく、張籍もこれ一例のみ。

〔開灩灩〕きらめく波紋が広がるさまを言う。

陳注の引く何遜「望新月示同羈詩」(『古詩紀』卷八四)に「的的与沙静、灩灩逐波輕」(的的 沙と静かにして、灩灩 波を逐いて軽し)と、波を照らしてきらめく月の光を形容する。

唐詩では、張若虚「春江花月夜」(『全唐詩』卷一一七)に「春江潮水連海平、海上明月共潮生。灩灩隨波千萬里、何処春江無月明」(春江の潮水 海に連なりて平らかに、海上の明月 潮と共に生ず。灩灩 波に随うこと千萬里、何処の春江にか月明無からん)とある。唐詩の用例は、月の光に照らされる波のさまを言うことが多く、韋応物の「秋夕西齋与僧神静遊」(『韋応物集校注』卷七)に「漠漠山猶隱、灩灩川始分」(漠漠 山猶お隠るるがごときも、灩灩 川始めて分ると、月の光に浮かびあがる川のきらめきを詠む。ここでは朱鷺の動きに応じて水紋が広がっていくさまを言うが、そのきらめきもイメージさせる。

杜甫の用例はなく、張籍もこれ一例のみ。

この二句は朱鷺が人を避け、雛鳥を引きつれて身を隠すことをいう。そのように身を潜めていても、彼が動くところからは水紋が広がり、その存在が知られてしまうことを言う。李樹政は、この二句は賢者が身を隠してもその名が顕れることを喩えており、『毛詩』小雅「鶴鳴」の「鶴鳴于九皋、声聞于野」(鶴は九皋に鳴きて、声は野に聞ゆ)に類すると説明する。

7・8 誰知豪家網爾軀、不如飲啄江海隅

〔誰知〕朱鷺の身に今後どのようなことが起こるか誰にも分からないことを言う。

張籍の用例には、62「古苑杏花」(卷二)に「茫茫古陵下、春尽又誰知」(茫茫たり古陵の下、春尽くると又た誰か知らん)、また335「贈主客劉郎中」(卷六)に「憶昔君登南省日、老夫猶是褐衣身。誰知二十餘年後、來作客曹相替人」(憶う昔 君が南省に登りし日、老夫猶お是れ褐衣の身。誰か知らん二十餘年の後、來りて客曹の相替の人と作るを)とある。

〔豪家〕富豪、豪族を言う。

陳注の引く梁簡文帝「七勵」(『文苑英華』卷三五二)に「至如五陵金穴、六郡豪家、遠流歌於東夏、出秘舞於京華」(五陵の金穴、六郡の豪家の如きに至りては、遠く東夏に歌を流し、秘舞を京華に出だす)とある。

唐詩の用例は、初唐にはなく、盛唐の崔顥「渭城少年行」(『全唐詩』卷一三〇)に「貴里豪家白馬驕、五陵年少不相饒」(貴里の豪家 白馬驕り、五陵の年少 相饒からず)と渭城の裕福な家の若者たちが遊興するさまを言う。

杜甫の用例は二例。いずれも裕福な豪族を言う。杜甫「李監宅」(『詳注』卷一)に「尚覺王孫貴、豪家意頗濃」(尚お王孫の貴きを覺ゆ、豪家 意頗る濃かなり)とある。

また元稹「春六十韻」(『元稹集』卷一三)の「貴主驕矜盛、豪家恃頼雄」(貴主 盛に驕矜り、豪家 雄を恃頼む)、白居易「統古詩十首」其七(七一)の「我本幽閑女、結髮事豪家。豪家多婢僕、門内頗驕奢」(我は本と幽閑の女、結髮して豪家に事う。豪家 婢僕多く、門内は頗る驕奢なり)も、「豪家」の驕慢とその豪奢な暮らしを描く。

〔網爾軀〕朱鷺が網にかけられ、捕らえられることをいう。

陳注は盧全「觀放魚歌」(『全唐詩』卷三八七)を引く。盧全の詩は、常州刺史となった孟簡の仁政を讃えるものであり、その結びに「念魚、承奉刺史仁、深僻処、遠遠遊。刺史官職小、教化未能敷。第一莫近人。惡人唯口腹。第一莫出境。四境多網罟。重傷刺史心、喪爾微賤軀」(念えよ魚、刺史の仁を承け奉り、深きに処を僻け、遠く遠く遊け。刺史の官職は小にして、教化は未だ能く敷かず、第一に人に近づく莫かれ。惡人は唯だ口腹のみ。第一に境を出る莫かれ。四境には網罟多し。重ねて刺史の心を傷め、爾が微賤の軀を喪わん)とあり、魚と鳥という違いがあるものの、人を避け網を避けて身を保つべきことを言う。

網にかかる鳥と言えば、曹植「野田黃雀行」(『古詩紀』卷一三)が有名だが、張籍にもこれをモチーフとした429「雀飛多」(卷七)がある。張籍の「雀飛多」は、高く飛んで網にかかることがないように危険を避け、現状に満足すべきと雀に忠告するものであり、曹植の黃雀が鶴を避けて低く飛び、却って網にかかるのとは設定が異なる。この「朱鷺」も人の目を避けて身を隠すべきことを言うのである。

〔飲啄〕野の鳥が水を飲み餌を啄むさま。みすぼらしくはあるが、何にも拘束されない暮らしを言う。

陳注の引く『莊子』養生主に「沢雉十步一啄、百步一飲、不斲畜乎樊中。

神雖王、不善也(沢雉は十歩に一たび啄み、百歩に一たび飲み、樊の中に畜
 わるることを斬めず。神は王んなりと雖も、善からざるなり)とある。

唐以前では、何承天「雉子游原沢篇」(『宋書』樂志四)に「飲啄雖勤苦、
 不願棲園林(飲み啄みみて勤苦すと雖も、園林に棲むを願わず)とある。

唐詩にも用例は多く、杜甫も四例用いている。杜甫「寄賀蘭鈞」(『詳注』
 卷一四)には「勿云俱異域、飲啄幾回同(云う勿かれ 俱に異域なりと、
 飲み啄むこと 幾回か同にす)とあり、賀蘭鈞と貧窮の生活を共にしたこと
 を言う。

張籍の例はこれ一例のみだが、中唐に入ると「飲啄」の生活を積極的に求
 める例も見えはじめる。元結「喻灑溪鄉旧遊」(『全唐詩』卷二四一)に「終
 当來其浜、飲啄全此生(終に當に其の浜に來て、飲み啄みて此の生を全う
 すべし)、孟郊「空城雀」(『孟郊詩集校注』卷二)に「飲啄要自然、可以空
 城裏(飲啄して 自ら然るを要むれば、以て空城の裏にすべし)とある。

〔江海隅〕遠い海辺の片隅。隱者の住処であり、政治の中枢から離れた僻地
 というイメージもある。

〔江海隅〕の用例は、梁の陸倕「以詩代書別後寄贈詩」(『文苑英華』卷二
 四七)に「余本水郷士、閉門江海隅(余は本と水郷の士、門を江海の隅に
 閉ざす)と世を避けて暮らす場所として見えるもの、他に例が見当たらず、
 唐詩の用例も張籍の例のみである。

〔江海〕は世を避ける人の住む所であり、『莊子』刻意に「就菽沢、処間
 曠、釣魚間処、無為而已矣。此江海之士、避世之人、間暇者之所好也(菽
 沢に就き、間曠に処り、魚を間処に釣り、無為なるのみ。此れ江海の士、世
 を避くるの人、間暇なる者の好む所なり)とある。

また『呂氏春秋』審為に「中山公子牟謂詹子曰、身在江海之上、心居乎魏
 闕之下、奈何(中山公子牟 詹子に謂いて曰く、身は江海の上(ほら)に在り、心
 は魏闕の下に居るは、奈何と)とあり、国の中心から離れた僻地という意も
 含む。

唐詩以前の用例では、例えば沈約「字省愁臥」(『文選』卷三〇)は「纓珮
 空為忝、江海事多違(纓珮は空しく 忝きを為し、江海 事 多く違えり)
 とあり、『莊子』を踏まえて隱遁の志の意で用いる。

〔江海〕の唐詩の用例は多く、例えば初唐では宋之問「過史正議宅」(『全
 唐詩』卷五二)に「不見吳中隱、空餘江海濱(見ずや吳中の隱、空しく江
 海の浜に餘さるるを)とあり、盛唐では王昌齡「別劉諤」(『全唐詩』卷一四
 〇)に「身在江海上、雲連京国深(身は江海の上に在るも、雲は京国に連
 なること深し)とあり、都から遠く離れた僻地、隱者の住む地として用いら

れる。

杜甫の詩にも十数例あり、例えば「送韋書記赴安西」(『詳注』卷二)に「欲
 浮江海去、此別意茫然(江海に浮かびて去らんと欲す、此の別れ意茫然た
 り)とあるのは、都から離れて隱遁しようとすることを言う。

張籍はこの一例のみ。

結びの二句は、「爾軀」とあるように、朱鷺への問いかけで結ばれている。
 この辺りでは、いくら身を潜めても、金持ちの網にいつ捕らえられるかもし
 れないから、人里から遠く離れた所へとゆき、みすばらしくとも拘束されな
 い生活を送ることを、朱鷺に勧める。

【補】

一 六朝の「朱鷺」と張籍の「朱鷺」

【題解】で述べたように、六朝の「朱鷺」五例のうち、梁の二例と陳の三
 例は、その内容がやや異なる。

梁の二例は、朱鷺に自らをなぞらえて、君主の恩愛を願うものであり、そ
 のため朱鷺は特別な能力もなく、弱い立場にある存在として描かれている。

これに対して陳の三例は、それぞれ内容が異なる。陳の後主は、君主の立
 場から朱鷺を優れた賢者に喩え、優秀な臣下がおりながら、彼らが活躍する
 のにふさわしい条件を整えられないことを憂える。蘇子卿は、朱鷺を瑞鳥と
 し、朱鷺が天子の恩恵に感じて上林苑に飛来したことによって、君主を讃え
 る。そして張正見は、朱鷺の経歴を示し、朱鷺とは何かを説明するものであ
 る。このように陳の「朱鷺」は三者三様ではあるが、或いは彼らが朱鷺を主
 題として唱和しあい、張正見は朱鷺の優れた性質を讃え、後主は君主の立場
 から臣下を讃え、蘇子卿は臣下の立場から君主を讃えた詩を制作しあつたの
 かもしれない。

張籍の朱鷺も優れた性質を持つ鳥であり、この点では陳の朱鷺に近い。し
 かし張籍の朱鷺は、むしろ君主の恩愛を願う梁の「朱鷺」二例と対応するよ
 うである。

梁の「朱鷺」二例をあげれば、次のようである。

梁・王僧孺「朱鷺」

1 因風弄玉水 風に因りて 玉水を弄び
 2 映日上金堤 日に映えて 金堤に上る

- 3 猶持畏羅織 猶お羅織を畏るるを持し
 4 未得異鳧鷺 未だ鳧鷺に異なるを得ず
 5 聞君愛白雉 聞く 君は白雉を愛し
 6 兼因重碧雞 兼ねて因りて碧雞を重んずと
 7 未能聲似鳳 未だ声は鳳に似る能わず
 8 聊変色如珪 聊か色の珪の如きを變ず
 9 願識昆明路 願わくは昆明の路を識り
 10 乘流飲復棲 流れに乘りて飲み復た棲らん

梁・裴憲伯「朱鷺」

- 1 秋來懼寒勁 秋來たりて寒さの勁きを懼れ
 2 歳去畏冰堅 歳去りて冰の堅きを畏る
 3 羣飛向葭下 群れ飛びて葭の下に向かい
 4 奮羽欲南遷 羽を奮いて南遷せんと欲す
 5 暫戲龍池側 暫く龍池の側に戯れ
 6 時往鳳樓前 時に鳳樓の前に往く
 7 所歎恩光歇 歎く所は恩光の歇き
 8 不得久聯翩 久しく聯翩たるを得ざること

前者は、「玉水」「金堤」で遊びながらもまだ危険におびえる朱鷺が、君主の庇護を願い、「昆明」への道を求めるものであり、後者は、秋が到来したために南へと飛び立とうとする朱鷺に、君主の恩愛が尽きてその庇護を失った悲しみを重ねあわせるものである。

それぞれ朱鷺の立場は異なるものの、この両者に共通することは、君主の庇護を求め、君主の宮苑にやどることを求めているところである。

これに対して、張籍の朱鷺は、人を避けて隠棲を求める鳥であり、梁の朱鷺とはまったく正反対の生き方を志向している。

ここで、敢えて梁の「朱鷺」との関係を整理すれば、張籍の冒頭は、王僧孺のそれと似通っており、両者はいずれも水辺に戯れる朱鷺のようすを描出するところから始まる。

しかし、語釈でも述べたように、「金堤」が上林苑やその内にある昆明池を想起させる語であるのに対して、「春塘」はそのような所から少し離れた閑静な場所をイメージさせる。

そして、王僧孺の「朱鷺」が、皇帝に気に入られて、その「金堤」から「昆明」の池へと行くことを願う思いによって結ばれるのに対して、張籍の「朱鷺」は、もっと遠く「江海隅」に飛んでゆくほうがよいと問いかけて結ばれ

ている。

また裴憲伯の「朱鷺」が、宮苑から南へ飛び立つ朱鷺を、君主の恩寵が尽きて庇護を失ったことと重ねあわせるのに対して、張籍の「朱鷺」は、5句に「避人」とあるように、自ら進んで人を避け、深い谷川へと身を潜めようとしている。

以上のように、張籍の「朱鷺」は、梁の「朱鷺」の設定を参照しつつ、その志向する方向性を反対にして、朱鷺を俗世を避けて隠棲しようとする鳥として描いている。

二 詩の構成と寓意について

この詩は八句と短いにもかかわらず、二度も換韻しており、次のような構成になっている。

- 1・2句 春塘に飛来した朱鷺
 3・4句 身を潜めても、その美を隠すことができない朱鷺
 7・8句 朱鷺への問いかけ

冒頭二句は、朱鷺が飛来するという設定であり、「春塘」「緑樹」とあることから、そこが閑静な庭園の周辺であることが示される。

中間の四句は、その朱鷺が素晴らしい羽毛をもち、遠くから飛んできてこの地に憩うことを言う。そこで朱鷺は家族とともに人目を避けて身を潜めているけれども、自然とその存在は知られてしまう。

結びの四句は、その朱鷺に対して、「豪家」の網にかかる危険を避けためには、もつと辺鄙な土地に行つたほうが良いと問いかけている。

このように、危険を避けて暮らすことを問いかける設定は、7句「網爾軀」の注でも言及した⁴²⁹「雀飛多」(巻七)にも見える。

張籍「雀飛多」

- 雀飛多 雀飛ぶこと多くして
 觸網羅 網羅に触る
 網羅高樹顛 網羅は高樹の顛
 汝飛蓬蒿下 汝蓬蒿の下を飛べよ
 勿復投身網羅間 復た身を網羅の間に投ずる勿かれ
 粟積倉 粟は倉に積まれ
 禾在田 禾は田に在り

巢之雛
望其母来還

巢の雛
其の母の来たり還るを望む

この作品において、張籍は網にかかった雀に次のように呼びかける。網は高い樹木の上にかけてられているのだから、高く飛んで再び網にかかるなよ、食料は十分にあるのだし、雛たちも母の帰りを待つてると。ここには、敢えて危険を冒すようなことはせず、現状に満足し、家族のことを考えようとする姿勢がうかがえる。

張籍「朱鷺」の結びも、隠棲を求める朱鷺に対して、処世の術を説いたものであり、そこには、身を潜めていても、その美名が世に現れてしまうような隠者に対して、いつかはその美名を慕う有力者から招聘を受けることもあるかもしれない、さらに俗世から離れた地に行くべきと問いかけたものであったのかもしれない。

李樹政は、この詩は古題を借りて今を諷諭するものであり、「南山捷徑」の故事(『新唐書』隱逸伝)を踏まえて、深山に隠棲しても、朝廷に召還されてしまうかもしれないのだから、高士は「江海隅」で暮らすほうが良いということを示すものとする。

さらに李樹政は、陶淵明「帰園田居六首」其一(四部叢刊本卷二)の「誤落塵網中、一去三十年」(誤りて塵網の中に落ち、一たび去ること三十年)を引き、更に中唐期の有名な隠者であった盧鴻・吳筠・孔述睿・陸羽・陸龜蒙らがみな朝廷の詔を受けて官職を得たことを挙げ、これは、漢・東方朔の

「俗世に在つても世を避け身を全うすることができるのであり、必ずしも俗世から離れた場所に棲むに及ばない」(『史記』滑稽列伝)という言葉と同じであると注記する。これは真の隠者は場所を選ばないものであり、それに比して、名利を求めて隠棲する当時の似非隠者たちへの批判を含むと解すものようである。

【補】一で述べたように、六朝の朱鷺が君主の恩愛を願う鳥であることを考えれば、或いは当時の似非隠者に対する批判もあったのかもしれないが、作品自体は朱鷺を批判するようなところはなく、むしろ⁴²⁹「雀飛多」(巻七)のように、その身を案じて処世の術を説き聞かせようとするかのようである。

隋唐の「朱鷺」の作例は、張籍のものしか現存せず、語釈でも指摘したように、唐詩の「朱鷺」の用例は十数例しかない。またそれらは、「朱鷺」を樂曲の名として用いており、「朱鷺」の内容を踏まえると考えられるのは、顧況の一例のみである。

張籍が、唐代に作例もなく、また詩材としてもさほどポピュラーではなかった「朱鷺」を敢えて選択した理由はいま明らかでないが、六朝の朱鷺とは全く反対の、隠遁を志向する朱鷺を、張籍が描こうとしているところを、ここではまず抑えておくべきであろう。

そのうえで、そこにどのような寓意を読みとるかということは、それが誰に向かつて発せられたものかということを読みとることもあり、⁴²⁹「雀飛多」(巻七)のような作品とも関連させながら、今後継続して考えてゆく必要があるだろう。

(佐藤)